
何故か彼女はついて来る

坂津狂鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故か彼女はついて来る

【Nコード】

N0675V

【作者名】

坂津狂鬼

【あらすじ】

才能と呼ばれる能力を開発する学園に入学して早1ヶ月。

はすのかげる蓮野景は、席替えて勝ち取った窓際席で窓の外を見続けていた。

それはただの彼の趣味なのであるが、そこに何かを感じた黒笠灯澄くろがさひずみは独自に景を調査していた。

彼らはまだ互いを知らない。知らないが故の平穏だった。

しかし景と灯澄は最悪の形で接触してしまう。

加害者と目撃者という形で……………

章設定しましたが、章のタイトルは後で変えるかもしれません。
いや、そもそもタイトルなんか意味は（r y

スタートライン

窓の外から景色を眺めるのが好きだ。趣味と言っても過言ではない。外の景色を眺めながら、色々な事を考えたり、考えなかったり、何かを観察したり、観察しなかったり。

そういった事をしてるのが好きなのだ。そうしていると自分が……。

自分がまるで傍観者になったようで、窓の外から景色を眺めるのが好きなのだ。

傷付くのが怖いだけだろ。もう少し誰かと仲良くした方がもっと楽しいと思うよ。お前、生きてて楽しい？

この趣味のせいで色々な人間に、色々な事を言われてきた。

同情からの誘いだったり、感情論をぶつけてきたり、単純な質問だったり、暴言だったり、陰湿な言葉の塊だったり。

聞いてはいた。だが、これと言って耳を傾けても面白そうなものが無かった。故に無視した。

瞬く間に、俺の周りには人がいなくなった。残ったのは仕方なく関わろうとする大人と腐れ縁の男子だけであった。

ちなみに自分は男だ。腐れ縁が女子だったらよかったのにと何度も思ったことがある。

ウザいだけかもしれないが、しかし人は在り得たかもしれない可能性にしがみつくものである。ああ幼馴染の女の子なんて現実では起こそうと思って起こせるものじゃ……。――。

……まあそんな事はともかく。俺の周りには人がいなくなっていた。別にそれで構わなかった。

高校進学の時も、大して悩みはしなかった。

誰かと一緒の学校に行きたい、などの希望も無かったし、俺の希望は移動距離が自宅から一番短い所か極端に遠い所かの二つに一つだった。

結果、俺が進学する事になった高校は自宅から一番近い場所にある学校になった。これは少し残念だった。

極端に遠い場所ならば電車やバスを使う事になるだろう。それらの窓から見える景色に少し興味があったから残念であった。

しかし近くて悪い事は何一つない。限界まで寝ていられるのだから。そして、入学してすぐさまに自分の苗字を恨む事になった。

はすのかける
蓮野景。それが自分の名前である。

つまりは、窓際の席では無い。これは重要な事だ。趣味を禁止にされたのだ。

4月からの一か月間、自分は死んでいた。というか思い出したい。1分1秒に生きる意味を感じられない。

そしてゴールデンウィーク直前の席替えにて、俺は生存を勝ち取った。

つまりここまでで何が言いたいかと言えば。

俺の高校生活は5月からようやく始まりを迎えるのだった。

スタートライン（後書き）

感想があったら書いてください

才能開発（前書き）

駄文で自分自身が何書いてるのか分からなくなった

才能開発

西宇津理学園。

それが自分を通う高校の名前であった。今知った。

どうやらこの西宇津理学園は中高一貫校……つまりはエレベーター方式の学校らしいのだが、自分は高校受験をしてここにいる。案外、生徒数が足りないのかもしれない。

まあそんな事、知った事じゃない。第一興味がない。

この西宇津理学園において、一番力を入れているのは才能開発と呼ばれるものだ。

才能と呼ばれる特殊能力を、葉などで人為的に開花まで誘導する。それを世間一般に才能開発と言うのだ。

この才能開発の発端は、数十年前にとある大学の実験中にたまたま発見された事から、とはなっているが、とある大学の名前も何の実験をしていたのかも明らかではない。

試しに、次世代の担い手であるインターネットを駆使して当時のニュース記事を調べようと思ったが、一切情報を得られなかった。次世代の担い手にはもう少し頑張って貰いたいものだ。

この不明な点が多い才能開発。しかもっと不明な事があるのだ。

この才能開発を受けて才能を開花した者を、才能者^{タレント}と呼ぶのだが……その才能者の総数は少ないのだ。

数十年前に発見されて、ウチの学校のように才能開発に力を入れている所があるのにも関わらず。

噂によると、どうやら学校を卒業してしばらくしたらいつの間にか才能が消えていたらしいのだ。

多分、正確には才能が使えなくなったという事なのだろう。

この件に対して学校側などは薬の効力が切れて才能が使えなくなった、と弁解している。

まあ才能が無くても一般生活にはなんの支障も無い。故に世間では

大して騒がれていないのだ。

しかし自分は思う。もしも薬の効果が切れて才能が使えなくなったのだとしたら、何故全員そうならない？

何故、学校を卒業していつまで経っても才能が使える者がいる？

……………今、考えたところで真相には辿り着けないか。ならもつと目先の問題からだ。

「なあ畑沼、お前の才能って何だ？」

「珍しく窓の外を眺めてないと思ったら……才能開発に興味持っちゃった？」

自分の隣の席に居た輩に話し掛けたところ、ムカつく口調で質問が返ってきた。

ちなみにこの輩、畑沼とは小学校からの腐れ縁である。

自分はこの縁を一刻も早く断ち切りたいのだが、中々物事は思い通りには進まないものである。

「まあ、そんな所だ。それでお前の才能は何だ？」

「分からん。そういうお前は？」

「自分のを知らないからお前に聞いてるんだ。4月の記憶が丸々無くなって困っててな」

どうやら才能開発は4月中に行われていたらしいのだが、自分は席の関係によって心的に死んでいた。

その為、4月の記憶が丸々無くなっているのだ。憶える気が無かった、と言った方が正しいだろうが。

「俺もだ。4月の記憶が無い……」

「それは驚いた」

そう言いながら、顔の筋肉を何一つ動かさず目の色も一切変わらぬ自分。

嘘を吐いているわけではない。所謂ポーカーフェイスというやつだ。外面では驚いてないように見えても、内心では4月の記憶を無くすバカが身近にもう一人いて驚愕しまくりなのである。

「明るい高校生活を送ろうと、告白したらフラれたんだ……………う

わーん」

「…………まあ、人生長いんだから頑張れよ」

残念ながら哀れな畑沼に掛けてやる言葉は、こんなものしか思いつかなかった。

しかし。

畑沼はこの調子だとしばらく話を出来そうにない。インターネットをいくら駆使しようともこれ以上は情報収集できないだろう。

学校側から渡された資料は全て読みつくした。もう手詰まりか……

まあ、この学校は幸い才能開発に力を入れている。待ち続けていれば、そのうち才能が何なのか分からない自分にも声が掛かるだろう。果報は寝て待て、って事か。

しかし自分は寝てるよりも、窓の外を眺めている方がいい。睡眠より趣味を優先したい。

どうせ待つしかないんだから。

という事で待ちに待って、午後の授業。

才能の実践授業やらなんやらを2時間……正確には100分かけてやるらしい。

2クラスの合同授業らしいが、ウチの学校って一学年何クラスあるんだろうか？

「ところで畑沼。自らの才能がどういった物か分からないアホ共は何処へ行ったらいい？ それとも才能無しで混じれという鬼設定か？」

「残念ながら、イージーモードで先生に才能について教えられるそう。ちなみに4月にやった内容らしいな」

「早くも留年生気分を味わえるわけか。大層、親切な学校だなココは」

合同授業は別館の体育館で行われるらしい。別館と言う事は、教室

が有る方が本館なのだろうか？

4月中の記憶が無いと結構困るな。自分に調べる意欲が無いというのも問題なのだが。

体操着に着替え、体育館に移動。

取り敢えず、畑沼の方が色々知っているので仕方なく後について行くことにする。

『それでは、才能の実習授業を—————』

出席番号順で2列に並ばされて、その前で先生がマイクを持ちながら何かを言っている。

この体育館で、入学式も行われたらしい。憶えていないが。

憶えてなさ過ぎる。せめて才能がどういった物かは憶えていたかったものだ。

「それで、畑沼。どこに行けばいいんだ？」

「ケイはつくづく人の話を聞かないな。いや、興味が無いだけか」

「ケイじゃない、カゲルだ」

畑沼はよく…というか完全に、名前をケイと勘違いしている。

景と書くから、決してケイと読めない事も無いんだが……………。

「ほら行くぞ、ケイ」

「だからケイじゃなくて—————」

その時、不意に視線を感じた。

悪意や殺意がある禍々しい奴じゃなくて、純粹にこちらを見ているだけの視線。

その方向を見る。生徒が大量に居て、誰が見ているかは分からない。視線の主が無駄に動揺して動かなければ、の話だが。

姿までは、はっきりと見えなかったが女子生徒だとは思う。

何故にこっちを見た？ まあ、俺には分からないし関係の無い事か。

序章終了

才能は三つの系統に区分されるらしい。

出現系、選択系、変異系。

それぞれ字に書いてのごとく能力なのだが、一応説明する。

出現系は、何かを出す能力。基本的に出せる数に制限は無いので、量の面では他の二つを上回る。

選択系は、何かを選ぶ能力。操作系と呼ばれる事もあり、何かの有無や度合いを選べることから、他の二つより凡庸性が優れている。

変異系は、何かを異なる物に変える能力。たまに変異系から稀有な能力が発見される事があるらしい。

才能は必ずこの三つのどれかに区分されるらしい。

ちなみに才能には、誰にも必ず一つはある、という大原則があるらしい。

これでまた、才能開発についての情報が集まったってわけだ。

あとは自分の才能が何なのかが分かれば、と思ったのだが……。

再検査は放課後にやるらしく、今日の授業は講義的なさっきの説明で終わり。あとは見学だそうだ。

「教師たちは、これを見せて何を学んで欲しいんだろうか？」

「女子の体操服姿を見て、三次元も悪くは無いんだぞ、と言う事を学んで欲しかったりな」

と言いながら、畑沼は早速物色(?)を始めている。

しかし、そういう事だったのか。まったく教師側の思考が分からなかった。

さて自分も早速……って、あれ？

「なあ畑沼。あそこで女子が一人サボってるんだけど、いいのか？」

「ケイ、言っておくが教師に限なく生徒を見てる事なんて——」

——ああ、彼女は例外だ」

畑沼の教師批判は、体育座りでどこか遠くに視線を飛ばす女子の姿

を見た瞬間に打ち切りを余儀なくさせられた。

「アイツは1年なのにもうランクSだからな、普通に免除だ」

「ランクS？ 何だそれ？」

「さっき説明されたろが……………お前って人の話を聞かないというか、人自体に興味が無いんだな」

「もしそうなら、お前とも話して無いだろうな」

一応、否定はしておく。別に人自体に興味が無いわけじゃない。

人が勝手に人を区別するやり方に興味が無いだけだ。

興味が無い話は自然と忘れる癖でもついているのかもしれないが、まあ別に構わないだろう。

「才能の評価は通常A～Eのランク分けで行われるんだが、彼女はすでにランクSを取った」

「通常評価じゃ収まらないほど優秀ってわけか」

「それ以上だな。『あなたが居ると他の子の評価が自然と下がるから、授業に参加しないで。代わりに評価を最上級以上でつけるから』って意味らしい」

「……………つまりに邪魔者の証をすでに貰ったってわけか」

「ちなみに俺達はランクXと呼ばれてる」

「最低評価はEじゃないのか？」

「？とXを掛け合わせたってところだ。評価なしの無能者たちって意味があるらしい」

「……………余程、カッコよくしたかったんだな」

能無しなりの意地だろうか？ いや、しかしそもそも……………。

才能は誰もが必ず一つ持っているのにも関わらず、何故ランクXというものが存在する？ 毎年、4月中の記憶が無くなるものがあるのか？

……………そう言えば、自分と畑沼の他にも講義的なものを受けた者がいる。こいつらも記憶喪失？

それは在り得ないだろう。いくらなんでも数が多い。偶然の域を超えている。

……才能開発には、絶対的に裏がある………………。そんな事を思いながらも、視線はずっとランクSの女子に向いていた。

趣味のせいかな、何かを見ながら他の事を考える事をついついしてしまう。

ランクSの女子も視線が気になったのか、こちらの方向へ目を向ける。

その視線を受けて…………何となくではあるが、彼女が悲しそうな感じに思った。何となくだから根拠など無いのだが。

——もしかしたら、優等生過ぎるのは辛いかもしれない。劣等生ではない者には分からない辛さがあるのかもしれない。例えば…………孤独とか。

なんて、勝手に想像してみたりするのも一興だな。勝手にその人間になりきるのも、案外面白いかもしれない。

彼女はすぐに視線を元に戻し、自分もまた、他の女子生徒を見る事にした。

「しかし…ブルマが絶滅したというのは悲しい事だな」

バカ沼に一発拳を叩き込む方が、世間的には良いのかもしれない。意見には同感……………何でも無い。

放課後である。再検査である。

CT……あの検査入院とかでよくある、寝かされて輪っかの下通らされる機械…説明下手で分からんな。

ともかくCTをやらされた後、白くて何も無い部屋に連れて行かれ、才能を使ってみなさいと言われたんだが……。

いや、自分の才能が何なのかは直感したっていうか何ていうか、分かってはいるんだ。しかし使い方が分からない。使う場面が分からない。

ある意味、無能者な状態なので再検査も最大延長されて……………教師陣が先に諦めるのが先になった。

つまりは自分は正式にランクXとなったわけだ。凄いな、驚きだ。まさかこうなるとは思っていなかった。

「はぁ……………」

夕日に照らされ橙色に染められた廊下を歩いていた。

自分もココまで長引くとは思っていなくて、鞆を教室に置きっぱなしなのである。

つまりは忘れ物を取りに教室へと戻っているわけだ。

外からは部活動のものがどうか分からないが、色々な怒声や掛け声が聞こえてくる。

……そういえば、ウチの学校の部活動は何があるんだろうか？

まあ元々入る気が無いから、調べる気などさらさら無いのだが。

そんな事を考えているうちに、自分のクラスの教室に到着。

ドア越しに見ると、鞆はしっかりと鞆の上に置いてある。何もされてはいないだろう。されていても問題は特に無いんだが。

後方のドアを開けて中に入る。

どうやらまだ生徒が居たようで、数歩ばかり歩いたら教卓の近くに誰かが居るのが見えた。

まあしかし自分には関係……………。

「……あつ」

声を上げたのは、教室に残っていた生徒である。

まるで誰かに秘密を見られたときの様な、あつ、であった。

しかしまあ見えなかったとはいえ、自分も迂闊だった。

教室に残っていたのは女子生徒。

腰まで届きそうな長い髪に、割と円らかな瞳。整った顔立ち。スタイルも良い方だろう。

ココに居るという事は、同じクラスだったのか。

午後の授業で見たばかりなので未だに頭に印象が残っている。

ランクSの女子生徒。名前は知らない。

あの時は体育座りで髪の長さが分からず、遠目に見たのでシルエットしか分からなかった。

だけど勘が、今向けられてる視線と体育館で向けられた視線は同じだと告げている。

つまり自分は、ランクSの少女の秘密を知ってしまったわけだ。

しかし普通、秘密と言ったらもうちょっと軽めなものなんだけどな。今現在、この我がクラスの教室に在るものは

生徒数分の机と椅子。それと教卓に黒板の上にある時計。黒板。ロッカーも含まれるだろうか？ あとは置きベンやらで教科書やノートがいくつか。

それと—————彼女と死体と自分の鞆であった。

序章終了（後書き）

次から第三者目線に書き方が変わるかも？

死体は消えて、世界は流れる

夕日に染まり終わる教室。

死体と少女と少年とその少年の忘れ物とその他色々な備品が沈黙の教室に存在した。

しかしその沈黙は一瞬。すぐに少女によって壊された。

「……あっ」

くろかさ ひずみ
黒笠灯澄はバレてしまった事で動揺した。

これから彼はどういう対応をするのだろうか？　もしかして自分を襲って来たりするのだろうか？

そうしたら、彼は死んでしまう。

灯澄はそう思い、出来れば彼が襲ってこない選択をする事を祈った。

「つ……」

はすのかげる
蓮野景は無意識に息を呑んでいた。

それでいて自然と視線は死体の方に向かっていった。人の好奇心という奴だろうか？

黒板に貼り付けられたように佇んでいる死体。

西宇津理学園の制服（男子用）を着てはいるが、顔面が破裂したように四散している為、一体誰なのかを確かめる事が出来ない。

景は心の底から、畑沼ならば良いのに、と祈りつつ、自分の鞆へと向かう。

彼は死体にも灯澄にも目を向けず、鞆を取る。

現実から逃げている、というには脚に一切の震えがない。

それどころか、無意識に息を呑んだ後の彼は冷静沈着だった。

一言でいえば興味が無い。自分には関係無い。

これが窓の外の風景ならば、景ももう少し興味を持ったかもしれない。

しかしココは窓の内。興味が無いもの。

興味が無いものをあれやこれやと考察する気力など景は生まれた時から持ち合わせていないのだ。

「……………思わなかったの？」

鞆を持ち、教室を出ようとしたところで灯澄は質問をした。

「こんな光景を見て……………あたしを見て、死体を見て、怖いって思わなかったの？」

「知るか。興味が無い。それに、自分には関係無い事になんてわざわざ恐怖しなきゃいけないんだ？」

景は灯澄の顔を見てそう言うのと、そのまま教室を後にする。

しばらく廊下を歩いていると……………。

「ちよつと待ってえー」

後ろから先程と同じ声が響いて来た。

無視しよう、と景は思わなかったがわざわざ立ち止まる程の仲でも無いのでそのまま歩き続けていた。

灯澄は小走りでこちらに近付こうとしている。いずれ追いつくだろう。

そう思ってもいた。

そして景の予想通り、数十秒後には灯澄は追いついて来ていた。

「何か用なのか？」

「い、いや……………とくにこれといった用は無いんだけど……………」

並列に歩きながら、景は灯澄の質問を待ってみた。

「そ、その……………座右の銘は何ですかっ！」

「……………」

彼女も見つか見られてかは知らないが、かなり動揺しているんだろう。仕方が無いさ、だって死体だもの。人が死んでいたんだもの。景は哀れな者を見る目で灯澄を見ながらそう思い、一応彼女の問いに真面目に返してやる事にする。

「無関心。あとは好奇心は人を殺すってどこかな。無駄に人の事を詮索したりするな」

「むむう……あたし、好奇心は人を殺すって言葉が一番嫌い」

「お前の好みなんて知った事か」

「まあ、そうなんだけど……」

何故か不貞腐れた灯澄を景は見事にスルーし昇降口へ。当然、灯澄もその後について行く。

「そういえば、ランクS。お前の名前を知らないんだが」

「あたしは貴方の名前を知ってるよ、ランクX」

「なら、あとはそっちが名乗るだけだな」

灯澄は少し罵倒する意味を込めて言ったのだが、ものの見事に景にスルーされる。

無能者である事を言われることに景は何の抵抗も無い。むしろ階級などに興味は無い。

灯澄は少し悔しそうにしながら、自分の名を言うことにした。

「……黒笠灯澄。灯に、水が澄むとかの澄で灯澄って読むの」

「そうか。これで警察に連絡するときに犯人の名前をしっかりとと言える」

「酷い、売るの？ 女の子を」

「そっちこそ酷い言い様だな。殺人現場を見たら通報するのが一般人の行動だ」

まあ、景には警察にわざわざ通報する気など無いのだが。むしろ明日の朝まであの状態で放置したらどうなるのが景には興味があった。

人間観察は趣味では無いが、変化がある背景の方が日常風景よりも見る価値がある。

しかしそれには灯澄が死体をそのまま放置しておいて、戸締りなどをする教師か警備員がああ教室の施錠を忘れるか教室内を見ずに施錠する必要がある。

そうなれば、景が望む背景が見れる前に警察が来てしまう。

景が望むものが見れる確率など、限りなく0に近い。

確率など景の興味の範囲外なのだが。

景たちは昇降口で上履きから靴に履き替え、校門を出ようとする。すると灯澄が、

「あ、景は生徒寮じゃないからココでお別れだね」

「……………生徒寮？」

景が自分の通う学校について知ってる事など、名前、中高一貫である事、才能開発に力を入れている事、その三つだけである。敷地内の事など自分の教室と体育館しか知らないのだ。

「説明されたでしょ……………って、景は4月中の記憶が無いんだっけ。ならしょうがないか」

「ムカつく言われようだな。言い返す事は出来ないけど」

「ウチの学校は生徒寮があるんだけど規模が小っちゃくて、全生徒数より部屋が少ないの」

「もうちょつと計画的に立てる事は出来なかったのか……………」

呆れて嘆息を吐く景に、灯澄は説明を続ける。

「希望制でその部屋を貸してるんですけど、あたしは激戦を乗り越えて無事に部屋を勝ち取る事が出来たんです」

「それはご苦労だったな」

「つていう訳で、さようなら……………また、明日！」

「おう、じゃあな」

灯澄に軽く手を振った後、景は早々に校門を出て帰路に着く。

学校から家への帰路の中、景は灯澄について考えていた。

そもそも景が自分から誰かの名前を聞くという事は、その人間に興味を持ったという事なのだ。

景が黒笠灯澄に興味を持った理由は二つ。あの光景と、その後自分にぶつけてきた質問だ。

あの死体は、景の推察だと灯澄がやったもので間違いない。経緯や動機、正当防衛うんぬんは置いといてだ。

黒笠灯澄はあの死体を殺した。すこし文学的におかしな文章だが、景の推察ではそうなっている。

そしてその殺人犯なる灯澄は、おそらく犯行をして数時間も経って

いないのにも関わらず、犯行後であれ景に現場を見られたのにも関わらず、座右の銘を聞いて来た。

動揺していたんだと思っていたが、さすがにその後の態度を見たら動揺だけでは説明がつかない。

景と普通に会話するかの様な接し方をしてきた。

普通の殺人犯など存在しない事は重々承知だが、いくらなんでも狂っているとは思えない。

または人を殺す事になれきっているというところか……………。

初犯であれ、連続犯であれ、黒笠灯澄は景の興味を惹きつけた。しかし、名前を聞いた後の会話。

(……………名前は自己紹介で言うだろうから、呼び捨てであれ問題は無い。生徒寮に住んでいない事も少し調べれば分かる事かもしれないが……………何故、記憶喪失だと知っている?)

景はその点が気になっていた。しかし、それについて灯澄には問わなかった。

今日、畑沼との会話。景はさり気なく自分が記憶喪失であることを告げている。

その時の会話をたまたま聞いた、という風に言い訳される可能性があったから聞かなかったのだ。

しかし何故、わざわざ景と畑沼の会話に聞き耳を立てる必要がある?

大声で話していたわけでもない。元々声が大きいわけでもない。話をわざわざ聴こうと思わなければ、他のクラスメイト達の会話に掻き消されてしまうほどの声量だった。

席の関係? それとも……………。

景の思考は家に着くまで続いていた。しかし家に着くと共に考察を諦める。

謎な部分が多く、また当人に接触しなければ分からない事だらけである。しかしそれは不可能で無いにしろ、面倒な事になる。

理由などは簡単だ。明日、黒板に貼り付けられていたあの死体が見つかれば警察が生徒全員……………最低限、景のクラスの生徒全員に事情

聴取を行なうだろう。

景は警察にわざわざ嘘などを吐く気は無い。正直に犯人と思しき人物の名を言うだけだ。

そうになると、灯澄に会うには留置所か少年院などに面会として行かなければならない。

そんな面倒な事までして彼女と話したいわけでは無い。

故に景は黒笠灯澄についての思考を全て記憶の彼方へ捨て去り、家の中に入る事にした。

翌日。

「…………驚いた」

無表情のまま呟かれた景の言葉。彼の内心は今、台風が直撃した海岸のように荒れていた。

登校したての景が見た風景は、何一つ変わり映えのしないいつも通りの教室だった。

それはある意味平和の象徴であり、不変的で世界は今日も正常に回り続けてる証拠の一つである。

…………などと言えるのは、景と違い昨日の光景を見てない者だけだろう。

確かに昨日、黒板には死体が貼り付けてあった。

しかし、黒板はチョークの粉の後すら残さず綺麗であり、その綺麗さが景の感情を恐怖で煽った。

そして景がその死体の殺人犯であると予想した黒笠灯澄は、教室の真ん中より前の席で優雅に本を読んでいた。

(…………ふざけるな…………)

別に景は変化した教室の風景を見たかったわけでは無い。むしろ、そんなものはどうでもいい。

今重要なのは、まるで昨日の光景が嘘のように世界が流れて、黒笠灯澄が何食わぬ顔でこの教室にいるという事実である。

昨日、あの光景を見たのも黒笠灯澄と話した事も全て自分の妄想や夢だったというのなら景は素直に受け入れる。その後に自分を嘲笑し律しればいい話だからだ。

しかし分かる。分かっってしまう。分かりたく無いものが分かっってしまう。

昨日のあの光景も黒笠灯澄と話した事も全て事実でありながら、その上で、昨日の黒板に貼り付けてあった死体がまるで存在しなかったように世界が流れて行っている。

景はその証拠を掴んでいる。いや、掴まされた。

ランクSの少女と面識を持つ機会など、普段の景には無い。興味が無い事を忘れる癖があるから記憶を頼る事は出来ないが。

在るとすれば、昨日の会話しかないだろう。それしか無いのだ。

しかし彼女は、黒笠灯澄は教室のドアの付近で佇む景に気が付くと、よりにもよって笑顔で手を上げてきた。

おはよう、などの意思表示なのだろうか？　ちなみに景の後ろに生徒など一人もいなかった。

(…………ふざけるな…………)

もう一度、心の底から景は思う。

好奇心は人を殺す、とはよく言ったものだ。好奇心が無ければ人は何も学ぼうとしない。

何も学ばないという事は無知という事だ。真に人を殺すのは、好奇心などではなく無知だ。

無知こそ人を殺す最高の凶器だ。

景は昨日、灯澄に言った言葉を否定した後にもう一度、灯澄の顔を見る。

未だに灯澄は笑顔でこちらを見ていた。それが景の感情が恐怖に震える原因だと知っていてやっているのだろうか？

しかし、いつまでもここで躊躇い続けるわけには、動き出さないわけにはいかない。自分の感情を抑えつけて景は教室に足を踏み入れる。

――出来れば全てが、自分の夢である事を望みながら。

死体は消えて、世界は流れる（後書き）

サブタイとかって、考えるのが面倒ですよねえ

アレ

「どうしたケイ？ お前が珍しく窓の外も見ずに机に突っ伏すなんて……なんかあったのか？」

「黙れ畑沼。今日は話しかけんな」

心配して話しかけてきた畑沼に対し、景はキツパリと顔も見ずに失礼極まりない事を言う。

「そうかい」

景からそう言われなれている畑沼は、拒絶を受け取り、どこかへ行ってしまう。

（……今はこれでいい。相手を誘い込むにはこの状態の方が良い……）

机に突っ伏したまま、思案する景にしばらくしてからまた話し掛ける人物が一人。

「景、ちょっと話があるんだけど」

「……という話だ？ ランクス 黒笠灯澄」

景はそう言いながら、表情の起伏が少ない自分の顔面に感謝していた。

朝、景は灯澄に話しかける事なく自らの席に直行。そのまま突っ伏して授業を受けていた。

自分から話し掛けるのが癪だったのだ。非常に子供っぽい理由だが、それが景の本心だった。

あくまで景は無関心を座右の銘に掲げているだけで、無感情なわけでは無い。

ポーカーフェイスと無関心によって、中学校の頃に人型ロボットかげるん一号という変なあだ名を付けられた景ではあるが、もしも自分のあだ名に興味があったのなら、そのネーミングセンスの無さを糾弾しただろう。

無関心≠無感情である。景だって所詮は一般庶民である。

無関心無感情の完璧超人の冷血漢など、一般家庭で育ってきた景にとっては無理な要求である。
ともかく。

景は興味を持った黒笠灯澄との接触を自発的にするのが非常に気に食わなく、イジメっ子よろしく、黒笠灯澄を無視したのである。
そして相手からの接触をずっと待ち続けたのである。本当に子供っぽい事をするものだ。

「まあまあ。慌てずに、お昼でも食べながら話そうよ、景」
待ち続けた結果が、昼食の時間である。

「ああ。分かった」
午前中を無為に過ごした景は、席を立ち、素直に灯澄の後について行く。

連れ出されたのは屋上、なわけが無く……そもそも西宇津理学園は屋上へ通じる扉の鍵をいつも閉じている……中庭の一角であった。
そこで早急に昼食を済ませ、質疑応答に移る。

景としては窓は無いにしろ、遠くの景色まで見渡せる屋上の方が魅力的ではあったが、相手から話を集中して聞いた方が良いという理由で、どうにか自分を納得付けてはいた。

—————2秒前までは。

「何故、そんなに引っ付く」

「ベンチが狭いからだけど？」

「そんな訳があるか。とにかくもう少し離れろ、スペース空いてるだろうが」

「嫌よ。離れちゃう」

西宇津理学園の中庭は、整えられた芝生に所々花壇が有り色々な花が植えられている。木製のベンチもいくつかあり、その一つに景と灯澄は座っている。ちなみに二人の距離は数センチにも満たない。
ベンチの長さから言って、3〜4人用だろう。だから景の言い分に間違ったことなど一つたりともない。

景の判断は至って正しい。中庭の様子が渡り廊下から見えていて、割と大勢の生徒にその密着している様子を見られて殺意を抱かれ、しかし女子の方は名も高きランクSの為に才能を使用し今すぐ殺そうとする本能をどうにか抑え、後で景が一人になったところを闇討ちしようと言論む生徒がいる事に気付いているかはさておいて。景の判断は至って正しい。

「あたしが景に聞きたい事は、距離を取ってでも出来るけど……」
そう言っただけは景の耳元に口を近づける。

「景があたしに聞きたい事は、距離を取っても出来る事なの？ 犯罪チックじゃない話なら離れても良いけど」

灯澄の判断も正しい事には正しい。

景が今すぐに訊きたい事の基準点となるのは、あの光景——あの死体である。そして客観的に見ても主観的に見ても、灯澄はあの死体を作り出した張本人。言わば殺人犯だ。

中庭には今現在、景と灯澄以外の人間が居ない。しかし何処で誰が聞いているかなど分からないものだ。

例えば、渡り廊下のギャラリーがさらに増え、二人の会話を盗み聞きしようと画策し、才能まで使ったどうか会話聞き出すようにしている不当な輩が居ないとは限らないのだ。というかむしろ居るのだ。

加害者としては、なるべく、去った危機を掘り返したくはないだろう。

目撃者としては、なるべく、去った危機の真相を聞きたいのだろう。景は、この密着具合か事の真相か、どちらかを妥協しなければならなかった。

「……ならアレに関する事は一切聞かない。だから離れろ」

「残念……」

灯澄はがっくりと肩を項垂れ、景との距離を取る。

がっくりと残念そうにしたのは決して灯澄のみでは無い。

当然、渡り廊下にて闇討ちを企画していた数名の生徒も動機が無く

なってがつくりと暗いオーラを出しながら項垂れている。

正当な理由なしに学校で才能を使うのを良しとはしない、という校則で定められているからである。無闇に校則を破るほど彼らも愚かではないという事か。

ちなみに、風紀委員長が正当の理由（リアルに充実してそうな輩が30秒以上イチャイチャしている現場を目撃したなど）と認めた場合、殺しさえしなければ致命傷まで黙認されるという矛盾を大いにはらんだ狂った沈黙の掟があるのだが……景がそれを知る事になるのはしばらく後の事である。

さらに余計な情報だが、あと3秒、景の判断が遅ければ彼は致命傷を負わされていた。

非常に残念である。

「作者から殺気が………」

「ん？ 景どうしたの？」

「いや……何でも無い」

致命傷を負わされれば良かったのに。非常に残念である。

「それで、お前は何を訊きたいんだ？」

景の問いに、灯澄はどこからかB5サイズのノートとシャープペンシルを取り出し、

「ええーとっ……まず一人称。それから好きな食べ物、あと一応だけど趣味も。それからそれから――」

「ちよっと待て」

個人情報の聞きだしを始めた。景は慌ててそれを言葉で抑止する。

「何で止めるんですか？」

ふくれっ面の灯澄であるが、景の顔は半ば青白くなり始めている。

「何でそんな事を訊くんだよ？」

「それは、景が気になるから！」

景の人生経験上、そんな事を言われるのは生まれて初めてではあるがロマンを感じなかった。むしろ恐怖を感じた。

殺人犯に好意を抱かれたとしても、景としては大迷惑である。

「いやー、景ってなんかいつも窓の外を見てるじゃない？」

「まあ、趣味だからな」

「それって本当に趣味？」

「……………は？」

「大丈夫！ 分かっているからあたしは！ 景ってアレなんですよ？」

「…………アレ？」

景はとてつもなく、黒笠灯澄が自分に対して大きな誤解を抱いている気がしたが、あえて言わなかった。

というよりは、灯澄のいうアレというのが何なのかが知りたくなっ
てしまった。

はたして彼女は自分の事をどういう奴だと思って接触を図ってきた
のだろうか？ バカなのだろうか？

彼女のバカさ加減に付き合ってみるのも一興と思い、真実を口にす
る事を先延ばしにしてみた。

「そう！ 景って実は……………秘密組織の一員なんですよっ！！」

結論、バカである。

以上が景の思考の全てであった。

冷めきった景の態度に対抗するように、灯澄は熱く夢を語る子供の
様にはしゃいでいた。

「窓の外を見てるのは、皆と関わらないようにするため！ 唯一
話しかけてくるあの男子は組織の内通者で！ それでそれで！」

「そうかそれは良かったな。ところで、それが真実だとして、当人
に話したらどうなると思う？」

「大丈夫、あたしには才能があるから」

さっきの興奮は一体どこへいったのやら。灯澄は極めて冷静に淡々
と告げる。

ランクSなりの意地なのか？ と景は疑問に思ったが、先の誤解を
解くことを優先した。

「安心したところ悪いが、秘密組織など知らん。何だそれは？ 人
を改造してライダーでも造るのか？」

「それは悪の組織だよ！ しかも相当古いよ！」

「なんだ正義の組織だったのか。それじゃあれか？ 銀と赤の巨人と共に3分以内に怪獣を倒す地球辺りを防衛してる奴らか？」

「それは軍隊！ というよりそれも古いよ！」

「そうか。あの時から時計の針は遥かに進んでしまったのか……」

「なんで急に詩人っぽく!?」

灯澄がぎゃあぎゃあ喚く中、景は極めて冷静だった。というより景が灯澄を騒がせていた。

しかしいつまでも景が聞くのを我慢できるわけでは無い。

「そろそろ、お前について聞いていいか？」

「ダメ」

自分の血管ともいい理性が切れるとしっかり音が鳴るんだなあ、とのん気に思いながらも景の拳は次第に強く固められていく。

「放課後まで待って。お願い、景」

「そっちはお昼休みのうちに聞けて、こっちは放課後までお預けと？」

「そっちの方が多く聞けるからいいじゃん」

「なら何で昼休みに誘った」

「一刻も早く事の真相を知りたかったからだけど？」

景は悩んだ。もしかしたらこれは相手のボケなのではないのか、と。それはこっちの台詞だ！ っと大声でツツコミを受けるのを待っているんじゃないのか、と。

そんな事を悩んでいるうちに、灯澄は素早く席を立てしまう。

「あ、待て——」

「またね、蓮野景」
ランタX

相手に話し掛けたときの皮肉を返し、黒笠灯澄は校舎へと戻ってしまふ。

「……結局、お預けか」

景も続いて、喪失感に見舞われながらも席を立ち校舎へと戻る。
放課後、どこで待っていればいいのかすら聞いていない事には灯澄

が立ち去った時に気が付いた。

しかし別にそこは考慮しなくてもよいだろう。

どうせクラスは同じなのだから。嫌でもまた会う。嫌でも相手から話し掛けてくる。

蓮野景には拒否権は無かったし、拒否権を行使する気も無かった。

あるのは放課後に何かがあるのかへの興味関心。

この時の景の辞書には、後悔、という言葉は無かった。経験不足が原因であろう。

そしてこれから迎える放課後、黒笠灯澄と関わる事でその言葉は景の辞書に刻まれていくのであった。

アレ（後書き）

景さん、頼みますからもう少し動揺してください。

途中で「あれ？ 何でこうなったんだっけ？」ってなっただんですから。

放課後

気が付けば放課後。そんな事は景にとっては日常茶飯事であった。教室に灯澄の姿は無い。帰りのホームルームが終わると共に教室を出て行ってしまった。

景もすぐさま教室を出ようと思ったが、後々灯澄に文句を言われるのも癪^{しゃく}だった為、しばらく教室に残っていた。

その為、話し掛けてくる畑沼の相手をしなければいけない状況になってしまった。

「なあなあ、ケイよ。ケイ君よ」

「黙る事を進めるよう、畑沼」

「お前、昼飯をランクSのあいつと食べたって本当か？」

「ん、まあな。取り敢えず、下校時間だからお前はもう帰ったらどうだ？」

「マジかよ……。まあ、ケイが女子とつるむなんて事はどうでもいいけどよ」

「だったら何で話題にしたんだよ」

「これからそういう事は気を付けた方が良いぜ。暗殺される」

「……随分と物騒な学校に入ったもんだな、お前」

「お前もな。ウチの学校には沈黙の掟が—————」

「景、お待たせ！」

畑沼の言葉は、教室に戻ってきた灯澄によって遮られる。

景は灯澄の姿を見ると、すぐさま鞆を持って席を立ちあがった。

「とにかく、気を付けろよ。イチチャイチャするのは」

「イチチャイチャする相手がいない」

景は畑沼の顔も見ずに告げると、そのまま灯澄と共に教室を出る。しばらくお互い無言で廊下を歩いていると、

「ねえ、本当に秘密組織—————」

「違う。くどい」

昼休みの問答を灯澄が繰り返そうとした。

景は灯澄の台詞を聞かずに、一言で否定をする。

「じゃあ、あの男子は？ 交友関係とかを持ちそうにない景に話しかけてくるあの男子は？」

「腐れ縁だ、小学校からの。あっちが一方的に話しかけてきて、こっちが先に根負けして話すようになった。それだけだ」

「むう………つまらない」

「勝手に人に面白味を求めるな」

そう言って、先に景が昇降口に行く。その後に灯澄がついて行く。

そのまま靴に履き替えた所で、景は灯澄に問う。

「……お待たせ、と言ったからには何か仕掛けでも用意したのか？」

「お部屋の様子を確かめに、ちよっとね」

「部屋？ 監禁用のか？」

「うん。あたしの部屋、生徒寮のね」

前後の会話が繋がっていない、と景は内心で思ったが口には出さなかった。出す気が無かった。

景の認識が正しければ、黒笠灯澄は女だ。女性だ。♀だ。

つまりは女の子の部屋にご招待されているわけだ。男として断つてはいけない。

灯澄の後を景はついて行く。元々、生徒寮の場所すら景は知らない。校舎を横切り、グラウンドの横を通る。

グラウンドの様子を見て、景は思わず灯澄に話しかける。

「おい、ウチはまともな部活はやってないのか？」

景が見たグラウンドの様子は、おかしいものだった。

野球やサッカーなどの球技や陸上をやっている者は一人もおらず、だからといって一人一人もないわけでもない。

アスレチックのような物を設置して、その上で数名の生徒が何かをしている。

そもそもアスレチックなどグラウンドにあったらどうか？

そんな事を思いつつも一応、灯澄に聞いてみたのだ。

「まともな部活って……この学校の生徒は景以外の全員、才能が使えるんだよ。まともな部活をやるにしろ、まともな生徒が景一人だけじゃない」

灯澄の説明に若干ムカつきながらも、景は納得した。

この学校に通う生徒は、普通学校に通う生徒と丸きり違う。特殊能力なんてファンタジックなものが使えてしまうのだから。

特殊能力を使われてしまえば、使えない者にとっては厄介以外の何者でもない。

使える者も、使えない者から使ってもいないというのにあらぬ疑いまで掛けられてしまう。

両者の為にも、使える者がその競技をやらない事が一番の打開策なのだ。

「じゃあ、あれは何をしてるんだ？」

「さあ？ 決闘じゃないですか？」

「それは無いだろ……」

灯澄の発想は常に突飛していると景は再認識し、灯澄と共に生徒寮に向かって歩き出す。

「ココがあたしの部屋」

3階建ての白い外装の建物に連れられ、そのまま階段へ直行。そして2階の一番奥の部屋にて灯澄は立ち止まり、景にそう告げた。

こげ茶色のドアをしばらく見つめ、景は一言。

「で、なんで自分は周りから怪しまれているんだ？」

不審者や変質者や変態や人間社会のクズを見るような視線が次々と景に突き刺さる。さらには、こそそと何かを話している者までいるが、生憎、景の聴力は凡人並みなのではっきりとは聞き取れない。景自身、学校では主に窓の外を見る事しかしていない為、変な噂も立っていない。

あえていうなら、ランクXという真実しか、景を噂するような事は無いはずだ。

「あ、それはここが3階だからだよ」

灯澄は立て続けに説明する。

「この生徒寮は1階が食堂とかのスペースで、2階が男子の部屋、3階が女子の部屋っていう風になってるから、男子が来ることがあまりないんだよ」

「……………ようは、この階は男子の来れない聖域っていうわけか」
「ま、そういう事だね」

つまり自分は黒笠灯澄に話を聞くためにわざわざ誹謗中傷の嵐のど真ん中に連れて来られたというわけか。

灯澄の一言が自分の思考を肯定したように感じ、景は大きく肩を落とす。

「そんな事は気にせずに、さあ入って」

「入ったら死体が沢山あるなんて事は無いよな？」

そう言いながら、灯澄の開けたドアから景は早速、部屋に入っている。

珍しく、景は視線が気になったのだ。授業中に突き刺さるありとあらゆる視線をまったく気にもしない景が。

あまりにも禍々しい視線が紛れていたのだ。昼休みにも景はこれに似たものを感じていた。

(……………そういう事は気を付けろ、か……………)

畑沼の警告を思い出し、今日限りで黒笠灯澄から聞き出そうとするのを止めようと景は心の中で決め込んだ。

その為か。

冗談で言った自分の一言が、まさか現実になるとは思っていなかった為か。

景は入った部屋の光景に対して、開いた口が塞がらない気分であった。

学習机に教科書、ベットに枕に毛布。それと冷蔵庫とエアコン。
女の子の部屋、と呼ぶよりか男の部屋と言った方がいいようなシン
プルな内装だった。

それと、死体と死体と死体と死体。

まさか自分の言った冗談が現実のものとなるとは予測できず景は立ち尽くしていた。その後ろでは灯澄がドアを閉める音がする。つまり、退路は塞がれたという事か。

放課後（後書き）

すいませんね、グダグダで。
次あたりに少しは進むと思うんで勘弁……って読んでる人間が居ないか

因果応報

「これは……………なんだ？」

部屋に転がったままの死体を凝視しながら、景は背後にいる灯澄へ問いかける。

「死体だけど？」

「ふざけてるのか？」

「なんか資料でね、才能は大きなショックがあると開花しやすいってあったから。どう？ 才能は開花した？」

一体どこの資料だよ…………。

景は首だけ動かし背後の灯澄を見る。

彼女は、笑っていた。

「自分の才能が何なのかは分かってるし開花もしている。ただ使い物にならないだけだ。それよりも……………お前がこれをやったのか？」

「微妙だね。勝手に死んだに等しいし」

灯澄の中途半端で意味不明な回答に、景は眉をひそめた。

「そっか……………もう景の才能は開花してたのか。それじゃっ、これにはもう用が無いね。片付けさせるよ」

そう言った直後、灯澄は携帯を取り出しどこかへ電話を掛ける。

二言三言、会話を交わし電話を切った灯澄に景は問いかける。

「どこへ掛けた？」

「知りたいの？」

探るような目で灯澄に見られた景は、しばらく逡巡し、押し黙る事に決めた。

その様子を見た灯澄は笑顔で頷き、

「うん、それが一番いい判断だよ」

そう言った後に景の前に出る。

つられて景も視線を前に移すと同時に、呆氣にとられた。

無くなっていた。死体が、全て。跡形も残らずに。

「本当は、教室でもこういう風になるはずだったんだけど……その前に景が来ちゃったんだよねえ」

「…………何を、した？」

目の前の普通の光景に目を見開きながら、景は灯澄へ問いかける。

「ん？ だから片付けさせたんだよ。あたしの家って金持ちだからね、こういうものの処理が上手い人達を雇って、やってもらってるの」

「…………ふざけてる」

「割とマジメなんだけどなあ」

そう言って灯澄はベットのの上に座る。

それを見て景は窓辺の近くまで行き、そこに腰を下ろす。

「どうする？ 何から聞きたい？」

「お前の才能から」

灯澄は景を見ながら聞いて来るのに対して、彼は外の景色に視線を預け答える。

そんな景の様子をクスクスと笑いながら、灯澄は問いに答える。

「あたしの才能は変異系、自分を対象にした攻撃の対象をすり替える能力」

「対象をすり替える能力？」

「簡単に言えば、絶対防御の能力かな？ あたしに向かって放たれた暴力はあたしを介せず^{（間接的に）}に他の人に当てる事が出来るの」

「さすがランクSなこと……」

自分に向かって放たれた暴力を自分を介せずに他人に当てる事が出来る能力。

つまりそれは、デコピン、拳で殴る、足で蹴る、ナイフで刺す、銃で撃ち殺す、小さな暴力から人を殺すほどの暴力までありとあらゆる痛みを他人に押し付ける事の出来る能力という事だ。

銃であれ核弾頭であれ才能であれ、彼女を人為的に殺すのは不可能。それどころか自ら放った攻撃が自らを殺す可能性すらあるのだ。

絶対防御。人為的に作られた不幸を他人に押し付ける才能。彼女に

絶対に攻撃は届かない。

いや、絶対とは言い切れない。才能を無効化さえ出来れば、彼女に攻撃は届くのだ。

しかし。

もしも才能を無効化させる技術があつたとしたら先程の死体は生まれなかったのではないか？

「才能を無効化させる才能。そういった矛盾を孕んだ能力でしか、お前を傷付ける事は出来ないってわけか」

「あたしはそういったデタラメな才能者^{タレント}に出逢ってないから、今のところは絶対防御の能力っていうわけ」

「デタラメなのはどっちだ……」

変異系の才能には時々稀有な能力が発見されることがあると景は聞いていた。

しかしこの才能は稀有というレベルで済むのか、という疑問が景の脳内では巡っていた。

それとも才能というのはその位でなければ稀有な能力とはならないのか……。

「だからさっきの死体は自滅したんであって——」

「そんなのは説明されなくても分かってる。それより次の質問だ」
言い訳をしようとした灯澄の言葉を遮るように景はそう言う。

黒笠灯澄に対する疑問は大方晴れた。

自分を何故知っているのかも、死体が出来上がった理由も、死体が消えた理由も。

残る疑問は一つ。景の中では予想はついていて、詳細が分からない。

「黒笠……お前は何故、殺されかけた？」

あくまで黒笠灯澄の才能はやられたものをそのまま返す才能。それ以上にして返す事は出来ないのだ。

つまり死体が出来上がるという事実は、黒笠灯澄が殺されかけたという事実に等しい。

何故、彼女は殺されかけなければならない？

「さつき金持ちだからって言ったじゃん。だからだよ」

「それは理由の一つだろ」

外に向けていた視線を灯澄に移し、景はそう言う。

「金持ちってだけで連日殺されかけるほど、この世は物騒じゃない。ところ構わず連日殺しに掛かるほど、暗殺者とかは無知じゃないと思う」

昨日は教室で、今日は寮の部屋で。二日連続で殺されかけている。しかも最悪の場合、人の目につくような場所です。

プロの暗殺者というものを景は知らないが、灯澄を殺しに掛かるにしても、もう少し計画的にやるだろう。場所も選ぶ。

景ならばそうする。人の目につけば割り込まれる可能性もあるのだから。

「アイツらは馬鹿ばかりだから人目とか気にしないんだよ。だから、ところ構わずあたしを殺しに来る。でも大概はあたしが一人になった時に殺しに掛かってくるから人目を少しは気にしてるのかも？」

「…………お前が寮で生活してるのもそれが原因か？」

「景って凄いな。何でわかったの？」

「金持ちが寮で生活なんかするかよ。しかも毎日殺されかけてる奴が。断然、実家に居た方が安全だ。そういうものの処理が得意な人間だって雇えるんだろ？」

「でも、あたしにはコレがあるから」

そう言って、灯澄は笑う。

その笑顔を見て、景はまた外へ視線を戻し言う。

「誰かに守って貰った方が楽だろうが。わざわざ人が自殺するシーンを見なくて済むんだから」

「自殺って、酷い表現だね景」

あははは、と大声で笑い出した灯澄を無視するように景は外を見続ける。

彼女は誰かにわざと刺客：ともいえない人間を送られている。彼女はそれが死ぬ度に片付けている。

故に昨日、教室には死体と黒笠灯澄があり、そして今日、教室には死体が無くなっていた。

ただそれだけ。それ以上は無い。

無視し続ける景の姿は、まるで灯澄にはもう興味を無くしたと言わんばかりの雰囲気を纏っていた。

その姿を見た灯澄は笑うのを止めボソリと、

「……………昔は、誰かが守ってくれるって信じてたんだけどね……………」

何かを呟いた灯澄に、景は目も向けずに探りもせずにした。

メール

「メアド交換しよ」

「……………は？」

景が寮の部屋から立ち去ろうとした瞬間、灯澄がそう言いだした。

「何で？ 理由は？」

「どうせ景も才能関係の授業は受けられないんでしょ、赤点確定状態だから」

「……………まあな。その代り、教師共が言うには留年にはならないらしい」

「あたしは評価が高過ぎて授業を受けられない。景は評価が低過ぎて授業を受けさせてもらえない。なら才能関係の授業の時は二人とも暇じゃない？」

「だから？」

「あたしの暇つぶしの相手に……………交友関係の一環で」

「じゃあな黒笠。今日は死体をわざわざ見せてくれてありがとう」

「ああ！ 待って景」

その声と同時に腰辺りに衝撃を感じた景は、首を動かして確認。

景の予想通り、黒笠灯澄が腰に抱きついていていた。

「離れろ。もしくは死ね」

「メアドくらい、いいじゃん！」

「死ね。もしくは離れろ」

顔を上げて抗議してくる灯澄に、景は冷たい眼差しでただ二つの事を要求してくる。

「メアド教えないと凄い事になるよ！」

「黙れ」

「明日から、全校生徒が景のことをイジメだすよ！」

「だからどうした」

「うう……………明日から…」

「明日から？」

「景は、明日から……すれ違う女性全員のスカートが捲れて変態扱いされて社会的抹殺寸前で警察に事情聴取を受けて冤罪で牢に入られて出所する時には年寄になって警察に復讐してやるーと思って爆弾作るけど自爆しちゃって周りを巻き込んでもう一度器物破損とかで牢に入れられて獄中で死ぬ前に――」

「お前がそんな作り話をする奴だとは思わなかったよ」

「作者の想像が尽きたからって止めないで景！　あたしはまだ言い足りない！」

はあ……こいつは天性のバカだ、と大きなため息を吐きながら景は悟り、

「悪かった。メアドくらいだったらやるよ」

「あ、大丈夫。景のアドレスも番号も自宅の場所も知ってるから、あたし。だから景があたしのメアドとか登録して」

「……………」

景の目が死んでいた。まるで『今までの会話は何だったんだよ、元から知ってるなら聞くなよ。そっちからメアド送ればいい話だろ。削除するけど。っていうかあとでアドレス変えところ』と語っているかのようだった。

灯澄は「携帯どこかなー？」と呟きながら景の制服のポケットを勝手に探っていた。

景の携帯を見つけた灯澄は、何食わぬ仕草でキーを押しながらこんな事を言う。

「……景の携帯って、アドレス3つしか登録されてないんだね。しかもそのうちの二つは両親だし」

「うちの両親は共働きだから、大体の連絡は携帯でするんだ。書置きだと見ないから」

「へー……誰が見ないの？」

「自分が」

携帯の画面から視線を逸らし、景の顔をまじまじと見る灯澄。

そんな灯澄に無言の圧力で、携帯を早く返せと訴える景。

しばらくの沈黙の後、先に喋り出したのは灯澄の方だった。

「…景ってさ、自分のことを僕とから俺とか言わないの？」

「言わないが？」

「不便じゃないの、それ？」

「不便でも仕方が無いだろ」

自分の事をなんて言ったらいいか、自分でも分からないんだから。

景の顔は一切動かない。感情を表さない。表情を作り出さない。

生まれ持ったのポーカーフェイス。故に、仕方が無い。彼が今、何を思っているのか彼にしか分からない。

最悪、彼にすらワカラナイ。

「ふーん……………まっ、いいや。それは景の自由だし」

そう言って灯澄は景の携帯を持ち主へと返す。

「さっそくアドレスを消させて貰うよ」

「そうしてもこっちからメール送れるよ」

「ならアドレスも変えとくよ」

「そしてら明日、新しいアドレスを聞きに行くね」

笑顔で言う彼女に対し、景は「勝手にしろ」と振り返りながら一言。そのまま部屋の外へ出て行く。

部屋を出る時にも灯澄は何かを言ったようだが、景はそのまま無視して行く。

蓮野家の夕食時は9時だ。景にとっては物凄く遅い時間である。

しかし家庭内で決まっている事を崩す気など景には無く、同時に景に自炊のスキルは乏しいものだった。

それに景は家に居たとしても、自室で窓の外を眺めている事しかしていなかった。大して食事の時間など関係は無い。

ただ大目に食べればいい話なのだから。

そして夕食の時。

一つのメールが届いて来た。

『アドレスはまだ変えてないのかな？ 夕食は何だった？』

基本、携帯の機能の9割を知らない景にとって、メアドを変えるなんて所業はそもそも出来るわけもなく、この後、両親に教えて貰おうと思った矢先にこのメール。

舌打ちをしながらも内心では、これは使えろと景は思っていた。

「何？ 彼女？」

「そんなんじゃない。迷惑メールだ」

母親からの問いに景は少し苛立った声で言う。

景にとっては灯澄からのメールは迷惑メールと同類だ。

間違っではない……、と平然と嘘まがいの事を平然と芝居を打って言った景は、立て続けに次の手を打つ。

「母さんでも父さんでもいいから、アドレス変更の仕方を教えてくれない？」

さすがに景の両親ともが機械音痴なわけが無い。そもそも二人の都合は仕事などの関係で携帯を使う場面が多いはずだ。

「いいわよ」

さっそく母親が承諾した。

ちよろい、と景が内心でほくそ笑んだのは家族の誰にも伝わらない。

景は母親に携帯を明け渡し、

「……あら？ これ、迷惑メールじゃないじゃない」

待ち受け画面に戻すどころか、メール本文の画面のまま明け渡してしまった失態に手が震えだしていた。

メール（後書き）

グダグダですいません。

誘い（前書き）

タイトルなんかに意味は、無い

誘い

「黒笠……話がある」

翌日の放課後、景から灯澄に話し掛けていた。

「な、何……？」

それを不審に思ったのか、それとも景のポーカフェイスが怒りや屈辱などで歪められているせいだからか、灯澄は少し動揺したように言う。

「ウチに来てくれ。頼む」

「……………ふえ？」

「もう一度言う。いつでもいいから、ウチに来てくれ。頼む」

そう言って頭を下げる景を、しばらくの間、灯澄は呆けた様子で見ている。

両者はそのまま動かず沈黙。

最初に口を開いたのは、必然的に灯澄だった。

「行く！ 今すぐに！」

「そうか」

景は頭を上げ、何故か目を輝かせている灯澄を見て、溜息を吐く。

そしてそのまま無言で教室を出て行く景の後を、彼女はついて行く。

「でも、急にどうしたの？ ウチに来てくれなんて」

「……昨日、メールを送ってきたろ？」

「うん」

「それを親に見られた」

「それで？」

「言い訳で、女友達だと言った。そしたら『友達なんて居たの！？ 連れてきなさいよ』と言われて、この始末だ」

「凄く突飛した経緯だね。友達ってだけなら、あの男子を連れて行けばいいんじゃない？」

「女友達なんて余計な嘘を吐いたからな、残念な事に畑沼を代理召

喚できない」

はあ……、と溜息をもう一度吐きながら景と灯澄は昇降口へ到着。靴へ履き替え、校門を出る。

「そう言えば、あたし久し振りに寄り道とかするかも」

「寮生活ならそうなるだろうな」

「でも寮の規則はそこまで厳しくないけどね」

「知るか」

その後も、景と灯澄は家に着くまで雑談を続けた。

ほぼ一方的に灯澄が話題を振り、それを景が適当な相槌を打つような状態ではあったが。

景は驚いた。

まず、蓮野家の夕食が6時になっていた事。

その事実、景の両親がもうすでに帰ってきていた事を示している。ちなみに、景が灯澄を家に連れてきたのは4時。

2時間もの間、景は溜息をひたすらに吐き続け、灯澄は一方的に景に話しかけていた。

そこまでは良かった。そこからが景にとって問題だった。以下、食卓に飛び交う台詞である。

「夕飯、食べていかない」

「何言ってんだこのクソ親は」

「あ、はい！ 是非」

「何敬語になってんだ黒笠。っていうか食っていく気か」

「ほら、早く座りなさい景」

「黙れよ、父親」

「じゃあ、あたしは景の隣の席で」

「断固拒否する」

「ほら、早く座りなさい」

「こっちの意見は無視か？ あア？」

「これ、おいしいです！」

「何でお前はすでに勝手に食ってやがるんだよ、黒笠」

「いいじゃん、おいしいから」

「あら嬉しい」

「お世辞だって事に気付け、バカ親」

「酷いな景。お世辞じゃないのに、義母様^{おかあさま}を馬鹿呼ばわりして」

「何故だろうな、一瞬だけだが義母^{おかあさま}って文字が見えたんだが。お前はうちの子供だったか？」

「こんな家庭なら、今すぐにでもここの子供になりたい！」

「あらそう。よかったわね、景」

「何故こっちに振った、何故こっちに振ったんだ」

「ふつつか者ですが」

「それ以上、喋ればぶっ飛ばす」

「こちらこそ、こんなダメな息子ですが」

「それ以上、喋れば殺す」

「だから嫌だったんだ……」

はあ……、と溜息を吐きながら景はそうぼやく。

「でも楽しかったよ」

反対に、灯澄は笑顔でそう断言する。

今日はもう遅いから泊って行きなさい、という母親のとても発言によつて景はすぐさまに灯澄を帰らせるため、手を引きながら家の外まで来てしまい、流れで途中まで灯澄を送っていくことになったのだ。

「また行きたいなあ」

「二度と来るな」

そう言いながらまた溜息を吐く景。

その姿を見て、灯澄は笑い、こう言った。

「ごめんなさい」

「あア？」

「ふふ……ただ、言ってみただけだよ」

景の反応を見てまた灯澄は笑いだす。しかし景は灯澄の顔を見て、眉をひそめる表情しかできなかった。

何故謝った？ 何を謝った？ どうしてこのタイミングで？

様々な事が景の頭の中で巡る。

しかしその思考は灯澄の一言で切れてしまう。

「ここまででいいよ」

「ん？ ああ、そうか」

「というか、ここまで来てなんだけど、あたしには才能があるからぶっちゃけ見送りなんて必要ないんだよね」

「……本当に今頃だな」

「ははっ……そうだな景、今度はウチに来てよ」

「何でだよ」

「だって、景のウチに行ったのにあたしの家に来ないなんて不公平じゃない」

「お前の寮部屋には行った。それで公平だろ」

「それじゃ、あたしの気が済まない」

「無茶苦茶な」

「昔から、よく言われたよ」

しばらくの無言。沈黙を破ったのは景だった。

「分かった。機会があったらお前の家に行けばいいんだな」

「よろしい♪」

笑顔でそう言った灯澄はそのまま別れようとし、急に後ろから景に抱き締められた。

「えっ！ かげかかか景、急にどうし——」

直後、爆風が二人を襲った。

誘い（後書き）

正直に言います。

今回、手抜きを致しました。小説進めるうえで書かなきゃいけないんだけど描写面倒だなあーと思って手抜きしました。次からしっかり、書きますよ。たぶん

襲撃（前書き）

タイトルなんか意味は無い
同様に、サブタイトルなんか意味は無い

襲撃

景は別に、危険を察知する能力も何かを視れる目も特殊な訓練もしていないような一般人だ。

ただ後ろから音がしたため、振り返った。

そうしたら、空中にいくつも手榴弾があった。

(……………はっ!? ふざけんな、馬鹿か!!)

何故、手榴弾がそこに有るのか理由は知っていた。しかしあまりにもバカバカしい。

(狙うんなら、本人狙えよ……………っ!!)

考えるより先に体が動き出していた。

正面を向き、立ち去ろうとする黒笠に抱き着き、

「えっ! かげかかか景、急にどうし——」

そのまま力任せに半回転。灯澄を盾にするようにして景はその身を隠した。

直後、爆風が二人を襲った。

灯澄の陰に隠れていた為か、景は少し強い風に当てられ、頬に何かが掠る程度で済んだ。

自分を対象にした攻撃の対象をすり替える能力の才能者である灯澄にはかすり傷一つ付いていない。当然の結果である。そうでなければ景がわざわざ盾にした意味が無い。

「ちよっと酷いよ景! あたしドキドキしたのに!」

爆風が一段落したところで、さっそく灯澄が景の行動にケチをつけてきた。

「助かったよ、黒笠。お前がいなかったら大怪我してただろうし、そもそもお前がいなければ巻き込まれることも無かったよ」

景は手榴弾の原因が灯澄であると予測していた。

というよりも、それ以外に原因があるわけが無かった。景は一般人で命を狙われる機会などそうそう無いのだから。

「何そのあたしが全て悪いみたいな言い方!? 女の子を盾にするっていう外道なことしたのはそっちだよ!」

「ランクXがランクSを盾にして何が悪い。むしろ正当、俺の判断は間違っていない」

「論理的にはそうかもしれないけど、倫理的には大間違いだよ!」

「倫理を守ろうが命は守れないんだよ。そういや、ここまでで良かったんだよな。じゃあ」

「じゃあ、で済むと思ったか! あたしの器はそんなに広くなーい!」

そう言うのと灯澄は景の襟首を掴み、引き摺ろうとする。

「何すんだ、離せ。地獄に堕ちるだろ」

「最後まで、巻き込んでやる! あたしを盾に使った罪だあ!」

「復讐は何も生み出さない、冷静になって離すんだ黒笠」

必死に引きずろうとする灯澄の手をどうにかして景は解こうと暴れ出す。

「あたしの才能にかけて、絶対に仕返ししてやる!」

「ランクXを盾にするつもりか!? 木の板よりも防御力が低いぞ!」

さすがに自分の命の危機を感じたのか、景が声を荒げた。その時、

「おいおいイチャイチャしてんじゃねえーよ。気に障る」

硝煙の向こうから、無精髭を生やした黒いコートの男が現れた。

「……この季節にコートって、頭おかしいんじゃないですか?」

その男の姿を見た瞬間、灯澄の表情が陰しくなり口調がますます調に変わる。

知り合いか……? と思い、景は一応灯澄に問い掛けてみる。

「全然。今日初めて会った」

「まあ、そりゃそうだろうな。俺も知り合いを壊すのは気が滅入る」
無精髭の男が、またも二人の会話に割り込む。

「後ろに居て……」

「そこ以外に安全な場所があるか？」

「はは！ それもそうね」

灯澄は笑顔を消して、無精髭の男へと向き直る。

「さつき、壊すって言ってましたけど、殺すの間違いじゃないんですか？」

「そんなんやったら、俺が死ぬだろおーが。それに俺の才能はそういうのに向いちゃいねえ」

「そうですか。でも、どちらにしろ貴方の攻撃はあたしに通用しませんよ？」

「どおーかなあー？ お嬢ちゃんの才能は強いけど、無敵ってわけじゃないだろ」

無精髭の男の一言に、灯澄は眉をひそめる。

「何が言いたいんですか？」

「お嬢ちゃんの才能は、あくまで自分を対象にした攻撃に適応されるわけで、攻撃以外には適応されないんじゃないか？」

「……それはつまり、あたしを拘束をすると言ってるんですか？」

「ちげえーよ。最初に言ったら壊すって。まあ、正確には――」

男は不敵な笑いを見せ、

「見せるんだけどな」

「ッ！！！！？」

ビクンッ、と灯澄の体が何かに反応するが、それ以上に何も起こらない。

笑い続ける男と硬直する灯澄、状況を窺う景。

三者三様の沈黙が作りだした空間で、景は無精髭の男よりも灯澄の様子を最優先で観察した。

無精髭の男は自分の才能を見せるものだと言った。

その発言と共に灯澄は何か反応するように体を動かし、それ以来、一切動きを見せない。

おそらくは無精髭の男の才能が原因だろう。言うまでもない。

今、灯澄は何かを見ている。それは自分にも降りかかる可能性がある

る。何よりも灯澄が倒れでもしたら、逃走すら困難になる。

以下の理由を持って、景は灯澄の様子を観察していた。

「あう……あ、あ………っ!!」

「黒笠？」

いきなり呻き出した灯澄に景は思わず声を掛ける。

すると、錆びた機械の様にゆっくりときこちなく灯澄が景に視線を向け、

「……………やだ!!」

「っ!？」

景の手を取り、その場から走り出した。

灯澄のいきなりの行動に、景は戸惑っていたが、一応最後まで無精髭の男から視線を逸らさなかった。

男は、相も変わらず不敵な笑い見せるだけ。

（あいつの才能が原因……………、でもなんでいきなり……………？）

男の姿が見えなくなったところで、景は灯澄へ視線を向ける。

「やだ、やだ、やだ、やだ、やだ、やだ———」

駄々をこねる子供のようにひたすら同じ言葉を繰り返しながら、泣いていた。

襲撃（後書き）

前回、手抜きしたので連続投稿。
やっとう超能力バトルに……発展しません。すいません

変化（前書き）

タイトルなんか意味はない
サブタイトルなんか意味は（r
y

変化

灯澄に連れられる様にして、景はどこぞと知らぬ廃墟に来ていた。後ろを確認するが、そこには無精髭の男どころか人影一つ見えない。

「おい、黒笠」

景が話し掛けるが、未だに灯澄は駄々をこねるように同じ言葉を繰り返しているだけだった。

「チッ……………」

舌打ちをすると景は強引に灯澄の手を振り解く。

灯澄は全ての動作を止め、ゆっくりと景を見る。

会話が出来る状態かどうかは怪しい所ではあったが、景は一応話し掛けてみることにした。

「いきなりどうした、黒笠」

「あう……………あ、あ……………」

「黒笠、お前は何を見せられたんだ？」

「い……………やあ……………」

その後、無言。沈黙。

灯澄は泣きじやくった顔で景を見つめ、景はいつもと変わらぬ表情で灯澄を見ていた。

そして景はゆっくりと灯澄に手を伸ばし、デコピンをした。

「痛ッ……………」

反射的に言ったのは景の方だった。

当たり前である。灯澄には、自分を対象にした攻撃の対象をすり替える才能がある。

デコピンであれ、銃撃であれ、自分に向けられた攻撃を相手に返すため灯澄が暴力に悲鳴を漏らす事などありえない。

（……………才能は機能している、か……………なら本当にあの男の言う通り、何かを見せられた、って事になるが……………人の精神をここまで揺るがす何か……………一体、灯澄は何を見せられたんだ……………？）

「おいおい、ここで鬼ごっこは終わりなのか？」

声のした方向を見ると、そこには無精髭の男。

「黒笠、逃げるぞ」

「おせえーよ」

景が灯澄の手を取ろうとした時、激しい頭痛が不意に到来した。

「がっ……あッ!？」

頭蓋骨が内側からの圧迫により破裂しそうな痛みに、景は思わず片膝をつく。

両手で頭を抱えるようにどうにか破裂を抑えつけようとする景。

「お前、一般人っぽいけどまあ取り敢えずココで壊れといてよ」

「この……ッ……なに、しやがったあ？」

「何って、見せてるだけだよ」

「なにッ………をお？」

痛みをどうにか堪えながら、無精髭の男を睨み付ける。

「トラウマだよトラウマ。過去でもっとも印象に残っている恐怖の記憶を思い出させる、選択系才能。まあ凡庸性はクソってくらい無いし攻撃性も無いが——」

「ぐあ……ガアああアアああッ!!」

「——確実に相手を内側から壊せる。今のお前らみたいにな」
あまりの痛みに景は屈みこみ、自然と漏れる絶叫を止められなかった。

「(………んだよ、これ！ 恐怖の記憶を見せる才能じゃないのか!?)」

破裂しそうな痛みの中、景は思う。

「(……黒笠がいきなりおかしくなったのは恐怖の記憶を見せられたから。それは理解できる………だけど今の俺の状態は何だ!?)」
限界に近かった。自らの脳味噌が膨れ上がり、頭蓋骨を圧迫し、あとは爆ぜるのみだった。

どうにかその感覚を両手で押さえつけようと景は手に腕に力を込める。

思考も回らなくなってきた。考えようとしても何もかもが飽和してしまう。

[illegible]

正体不明の現象。未知の激痛。

景は確かに恐怖に屈みこんでいた。

「んじゃ、さっさと自滅して貰おうか」

そう言う、無精髭の男は灯澄の足元にナイフを放り投げた。

灯澄に誰かが攻撃する事は不可能だ。才能によって攻撃対象をすり替えられてしまう。

しかし、灯澄自身が自分に攻撃すれば通じる。

金属音を立て足元に落ちたナイフを灯澄はしばらく凝視し、静かに拾う。

「さっさとソレを首に――」

「ツてーなあ……おっさん」

男の声を遮るように、景が静かに立ち上がる。

「……あー、そういうや学生でも才能があるんだっけか？」

「関係無い。オレはランクXだからな」

景は静かに男を睨み付けながら言う。

男は気付かないが、確実に今の景は変化していた。

普段ならば、景は一人称を使わない。俺、僕、私。自分を言い示す言葉など使わない。

「そもそも、オレにとって記憶なんてもんは意味無いんだけどなあ」

「ありゃー参った。一般人なら、思い出したくもない記憶の一つはあると思ったんだけど」

「残念だったなあ、
だけどオレには関係無い話だ」

そう言いながら、景は不気味に笑っていた。

さすがに男も景の変化に気が付いた。

「あちやー、一般人じゃなかったか」

「いや、一般人だ。ただ少し変人なだけで」

笑い続ける景に対して、無精髭の男はコートの懷から拳銃を取り出す。

「あのお嬢ちゃんにこんな物は通じないけど、保険はかけとくもんだなあー」

「安心しろよ、通じないことに変わりはない」

景の発言に眉をひそめながらも、無精髭の男は容赦なく引き金を引く。

放たれた弾丸は、景の胸部を貫き、肉体を爆散させる。

「は？」

声を上げたのは男の方だった。

当然だ。拳銃程度の破壊力では人体を爆散など出来るわけがない。あり得ないことなのだ。

「お前には徹底さが足りねーなあ」

声がした。景の声だ。爆散した肉片の一つ一つから聞こえてくる。聞こえるわけがない。あり得ない。

「恐怖ってもん見せんあら、在り得ないってレベルまでやらねーと」

声と共に、男の片足がもげた。大量の血液が噴出している。痛みはない。

その代りに、両腕から激痛が迸る。傷一つ無くもげてもない両腕が。

在り得ない。意味がわからない。理解できない。

怖い。

「痛みで泣あくとは思わなかった。他の拷問地獄も用意しておいたのに」

「う……あが……ひ……っ！」

言葉にもならない呻き声をあげる男はそのまま徹底的に壊れていた。

変化（後書き）

無精髭と不精髭、どちらが正解なんでしょう？
誤字だったすいません。

内側（前書き）

タイトルなんか意味はない。
サブタイトルなんかに（r y

内側

「雑魚いなあ、随分とオレらに大口叩いていたわりに」
景は地面に蹲り泣きじゃくる男を見ながらそう呟いた。

「……にしても、こうやって使うわけか。オレの才能は」
そう言って、自らの両手を見る。

今でも両手から感じる。偽物の才能の感覚が。
無精髭の男の才能は、過去の恐怖の記憶を思い出させ見せる能力であつた。

人の精神を壊すには向いていると無精髭の男は言っていたが、それはあくまで自分の才能の使い道の中での話であつて、彼の能力には攻撃性がなかった。

精神を壊すにしろ、ある程度の攻撃性があつてもいいはずだ。視覚だけでなく、五感……特に痛覚を思い出させてもいいはずだ。

しかし攻撃性が少しでも存在しようものなら、灯澄に才能で遮られた上に仕返しまで食らってしまう。

そのため灯澄に対する暗殺者は、攻撃性が皆無であり精神を壊すのに向いている才能者である必要があつた。タレントそれが無精髭の男である。そして景はその才能を組み替えた。

(………それにしても、あの頭痛……)

無精髭の男の才能に攻撃性はない。

しかし景は激しい頭痛に襲われた。

(………恐怖の記憶が無かつたから検索エラーが起こったのか？選択系だから有り得なくはなさそうだが………)

アレが治まったときには自分の中の何かが弾けた。

瞬間的に、才能の使用法が理解できた。閉じ込められていた本来がやっと解き放たれた感覚。

誰かに自分の何かを隠されている……？

「……おい、黒笠。大丈夫か？」

景は自らのどこもない不安をねじ伏せ、灯澄に向かって問いかける。灯澄は男の才能によって相当危ういレベルまで追い詰められていた。突飛的な行動に出る可能性も高い。そのため、景は灯澄の事が心配であった。

問い掛けに返してくる言葉は無い。

無精髭の男の才能は、確認は出来ていないが解除されたはずだ。

灯澄が今も恐怖の記憶を見ている可能性は皆無。しかし灯澄からの返答はない。

「黒笠？」

景は周囲を見渡す。しかし、灯澄の姿は無い。

「……………黒笠ッ」

景は知らない。灯澄が無精髭の男にナイフを渡された事を。しかし、どこか自分の内側で何かが訴えかけてくる。

【このままだと、黒笠灯澄は死ぬぞ】と。

灯澄がどこに行ったかなど景には見当がつかない。そもそも今いる廃墟の場所すら知らない。

ただ訴えかけてきた何かが、道案内をしてくれる。今はそれに従うだけ。

(……………そういや、この声……………さっきも……………)

景が《声》として感知した内側で訴えかけてくる何か。

先程もこれが聞こえた、景はそんな気がしていた。あまりにも激しい頭痛だった為に正確には憶えていないが。

ともかく、今は《声》に従うしかない。

景は自分についての思考を捨てて、全力で走る。

しかしそれはやはり、今までの景では考えられない行動だった。景の内側で、何かが変化した。それだけは確かだった。

「黒笠！」

一分も経たぬうちに、景は灯澄の元へ辿り着いた。

「……………景……………ごめんなさい」

景に背中を向けたまま、首だけを動かしそう呟く灯澄。

左手には、先ほど無精髭の男から渡されたナイフが握られてあった。
「あたしは景を全てから騙しています。そうでもないかと景が守れなかったから」

「……………何を言っている？」

「…………あのコートで無精髭の男、どうしたんですか？」

「オレの才能で、捻じ伏せた」

「やっぱり」

灯澄はさも当然のごとく、即座にそう言った。

「……………どういう事だ？」

「景の才能は、変わらないんですね」

「……………？」

「言葉の意味は分からない方が良いです。それにもう景は巻き込みませんから」

「ッ」

無意識のうちに景の体が動いていた。灯澄が何をしようとしているのか感じ取ったからだ。

「いつも優しいですね、景は」

独りでに灯澄は言葉を投げかける。

「でも、あたしはもう耐えられません。あそこまで見せられたら、もう…………」

「知った事か！ お前が何に耐えられようが耐えられまいが、オレには関係無い」

「……………あいつの才能もダメダメですね。昔に戻ってる……………それとも思い出したんでしょうかね？」

距離を詰めた景は、灯澄の左手首を強く握りしめ痛みでナイフを落とさせようとした。

瞬間、景は誰にも触れていない左手首に強い痛みを感じた。

当然だ。灯澄の才能はどんな攻撃でも対象をすり替える事が出来る。自分に降りかかる不幸を他人に押し付ける事の出来る才能なのだから。

(…………邪魔くさい、才能だ………………………ッ)

景は痛みに奥歯を噛み締めながらも、握る手を離す事はしなかった。無精髭の男は言っていた。灯澄の才能は攻撃以外のものには適応されない。

つまり、痛みは自分に返ってくるが手首の自由を奪う事は出来るという事だ。

離すわけにはいかなかった。

「止めた方がいいですよ。傷付くのは景ですから」

「オレにまでデスマス調か？ 気持ち悪い」

「…………別に景が無理する必要は無いんですよ？ あたしが死ねばいいだけです」

まっすぐ景の瞳を見て言った灯澄の一言。

それがこの上なく景をムカつかせた。

「死ねると思ってるのか？」

「自殺って言葉くらい景は知ってますよね？」

「そういう事じゃねえ。オレが止めないとも思ってるのかって聞いてんだ」

「…………何が言いたいんですか？」

「そのまんまの意味だ」

そう言うと景は掴んでいた手首を離す。

「自殺したいなら、先にオレを刺せよ」

「お前が死ぬなら俺も一緒に死んでやるー、ってやつですか？」

「違うなあ。お前じゃオレを殺せないって言ってやってんだ」

灯澄はしばらく景をまっすぐ見つめ、深呼吸をする。

対して景は、自分の内側で訴えかけてくる何かに従って才能を使用する準備をする。

「…………言っておきますけど、あたしは今の景だと思って、容赦はしませんよ」

「…………言っておくが、オレはお前が刺してきたら情け容赦なく即座にブチ殺すぞ」

最後に一回、灯澄が深呼吸をし、躊躇いなく一歩を踏み出す。
景は構えることなく、そのまま灯澄を迎え撃つ。

内側（後書き）

物凄く分かり難いと思います。

まあ、主人公の才能（能力）が特殊で説明してないので釈然としな
いんだと思います。

というか主人公自体がわりと特殊（？）なのかもしれません

漫然（前書き）

サブタイもタイトルも意味なんて無いんだよ

漫然

廢墟に、肉を貫き裂く音が少しばかり響いた。

黒笠灯澄が蓮野景の腹部を刺したからだ。

「何してるんだろう、あたし……………」

未だにナイフの柄の部分を握り続けながら灯澄は呟く。

その瞳は少し潤んでいるように見えた。

「……………本当に、あたしって何してるんだろう」

あまり深く刺す気は無かった。ただ死なない程度に、応急処置をして、救急車を呼んで、助かる程度に刺すつもりだった。

相当に難しい加減であったが、上手くできた自信が灯澄にはあった。しかし、自分から景を傷付けた。よりにもよって景を。よりにもよって自分から。

もう灯澄は自分自身を生かしておける気がしなかった。

「浅いなあ、それじゃ足りねーよ」

そう呟いたのは景であった。

痛みで気絶はしてくれるだろう、と灯澄は踏んでいた為、少し意外ではあったが驚愕とまではいかなかった。

次の行動をされるまで。

「やるなら徹底的にだ」

そう言って、景は灯澄を抱きしめた。

ナイフの柄を持ったままの灯澄をより自分の近くに抱き寄せたのだ。肉の抵抗が柄を握ったままの手から灯澄の脳に伝わってくる。

一瞬、思考が停止し、即座に灯澄は叫びだした。

「何やってるんですか！？ それじゃ死んじゃ———」

「関係無い。知った事じゃない。オレはお前を殺さなきゃいけないからなあ」

苦悶の声一つ上げないまま、景は灯澄の耳元へ囁いた。囁く事が限界だった。

「何言ってるんですか！　すぐに救急車を——」

ナイフの柄を離し、景から離れようとする灯澄。

それを止めるように、景はより強く灯澄を抱きしめる。

「いい。自分でやる」

「な、なに言ってるんですか……今の景じゃ無理でしょ！」

灯澄は言葉で景を説得するしかなかった。

無理に自分が暴れれば、何かの拍子により深くナイフが刺さってしまいう可能性すらある。

「結構深くまで刺さってるから、抜かなきゃ出血も酷くはならない」
「でも——」

「うるさせーなあ、お前は黙ってオレに殺されればいいんだよ」

「ッ！？　……か、げる………何を、したんですか？」

いきなり灯澄の姿勢が膝から崩れ落ちる。それと合わせるようにして景も地面に両膝をつく。

「お前は、オレの才能を知ってるんだよなあ？」

「………知っては………いるけど、正確な能力は、知らない………ですよ」

スキルリメイカー

「オレの才能は〈無能修正〉。一時的に才能を創り得る変異系才能。正確には、相手の才能を元に創り直した能力を一時的に自分の能力とする変異系才能。相手の才能を変異させて一時的に自分の物とする能力だ」

すべて内側で訴えてくる《声》の受け売りである。

コピー能力では無い。似通う部分もあるが、あくまで複写ではなく修正だ。

少しでもあれ、多くであれ、オリジナルに手を加えなければいけない。

「だからお前の才能を元に、今のオレは才能を使えるわけだ」

今、景が元になっている才能は、灯澄の自分を対象にした攻撃の対象をすり替える能力。

自分に降りかかる不幸を他人に押し付ける才能。

それを景は修正した。

自分に降りかかる不幸を元に、他人に別の形で返すように。

「自分を対象にした攻撃を受ける代わりに他の形にして絶対に相手に返す才能」

「無茶苦茶、ですよ……それに……」

「大丈夫だ。お前ごときの才能なんて壁にもなあらねーよ。絶対に相手に返すんだからな」

「……………景」

「なんだ？」

眠たそうな声で耳元で囁く灯澄に対して、痛みを堪え続けながら話を聞く景。

「一体……………どんな形にして、返してきたんですか？」

「……………忘却だよ」

躊躇いながらも、景は灯澄の問いに答える。

「ぼう……………きやく？」

「死体とかの記憶と……………オレの記憶をすべて忘れさせるようにして返した」

景は知らないが、灯澄は景の何かを知っている。

そしてそれが原因で灯澄の精神が壊れてしまったことも予測がついていた。

だから全てを闇へ捨て去る。

「……………ま…あ、あたしと景は……………ですか」

最後に、灯澄は何かを言おうとしたが呂律が回らず、中途半端にか景には伝わらなかった。

そのまま闇に吞まれるように景の体にもたれかかる灯澄。

「オレがお前の不幸を背負うから、お前はオレにも少しはある幸運を受け取ってくれ」

灯澄の耳元でそう呟き、精神的にも肉体的にも限界点を超えた景はそのまま後ろに倒れこんでしまう。

廃墟にて、少年と少女が発見されたのはそれから数時間後の話であ

る。

発見現場から数百メートル離れた所で何かをぶつぶつと呟き続ける男も発見される。

少年の腹部にはナイフが深く刺さっており、病院へ緊急搬送。

同様に少女も何か脳にダメージを受けたのか意識不明のため病院へ搬送。

近くで発見された男は精神病棟へ送られ、様子を見る事になった。

世間にとって小さく奇怪な事件は、何の解決もなく、犯人も上がらない、釈然としない結果となった。

少年にとって大きく不明慮だった出来事は、自ら深手を負い、自ら答えを知る者の記憶を消し、自らの謎をまた闇に捨て、漫然とした結果になってしまった。

漫然（後書き）

終了

カナシイヒト（前書き）

引き続き、タイトルなんかに意味はない

カナシイヒト

『カナシイヒト』

気に食わない。

『本当は泣きたいのに、顔では何でも無い振りして耐えてる』
まったくもって気に食わない。

『本当にカナシイヒト』

気に食わないよ、クソツタレが。

「おい、ケイ？」

「……………何だ、畑沼」

頬杖を突きながら、窓の外を見ている景に畑沼が話し掛けてきた。

「いや、何だじゃなくて。もう放課後だぞ」

「だからどうした？」

「いや、帰ろうぜ」

「ああ、そうだな」

「ところでケイ」

「だから、何だよ畑沼」

「このやり取り、もう20回目だぜ？」

「だからどうした？」

景の返答に、畑沼は嘆息するがそれでも会話を続ける。

「登校初日から窓の外ばっか見て先公の話を無視すんのはいつものお前だけだよー、ここまで上の空なのはお前らしくないぞケイ」

「誰が上の空だって？」

「はあ……………取り敢えず、立てよ」

畑沼の言葉に従う様に、景は立ち上がり、勝手に教室を出てしまう。
後を追う様に、畑沼も急いで教室が出る。

「おい、お前カバンは？」

「持ってきてない。必要無いからな」

「はあ………なんで男と二人で廊下を歩かにゃいけないのかな？」

「なら先に帰ればよかっただろ」

「そうしたらお前はいつ帰ってたんだけ？」

「さあな。知るか」

「だからだよ………なあ、ケイ」

「何だ、畑沼？」

「あの事件についてなんだけども、実際は何があったんだ？」

畑沼のいうあの事件というのは、2週間前の小さく奇怪な事件の事を指していた。

あの事件には蓮野景と黒笠灯澄、それと無名の男が関わっている。

そしてその三人の内、三人が加害者であり三人が被害者。

それが真実。しかし景はそれを言う気は無かった。言った所で結果が変わるわけではないからだ。

警察の事情聴取でも、景は『自分は黒笠灯澄とばったり会って、途中まで一緒に帰っていたところで通り魔に襲われかけて、廃墟まで逃げただけで刺されてしまい、その後の事を覚えていない』と答えた。

黒笠灯澄は記憶喪失、男は精神崩壊で、唯一まともに聴取が出来る景がこう答えてしまったらあとは景の腹部に刺さっていたナイフしか手掛かりが無い。

しかしナイフからは灯澄と男の両者の指紋が出てきてしまい、景の発言を元に警察は男を犯人と断定するが、景はさらに『通り魔の顔はしっかりと見えなかったが、こんなに髭を生やしてはいなかった』と言い、捜査は完全に難航。

そもそも最初から警察は真実には辿り着けない。

景を刺した犯人である灯澄は記憶喪失、ナイフの指紋をもとに捜査したとしても景の発言によって行き詰まり、仮に景の発言が虚偽だとしてもそれを裏付ける絶対的な証拠が無い。事件の発端である男の精神は二度と戻らないように景が徹底的に破壊した。景は真実など話す気が無い。

そんなわけない。否定した景を見て、灯澄は目を伏せて言う。

『本当にカナシイヒト』

それはお前の事だろ。

その言葉を言う権利が自分には無い気がして、景はただ黙るしか出来なくなっていた。

自分を傷付け自分が傷つけた人間に、その言葉を言えるほど景の肝は凶太くは無かった。

病室の事を思い出すのをやめ、景は自らの腹をさする。灯澄に刺された部分を。

あの時は激痛がしたが、今となっては痛みをまったく感じない。

景が気付いた時には病室のベッドで寝ていて、怪我は治っていた。痛みは若干残っていたが。

医者などに詳しくは聞いていないが、どうやら才能開発の副産物で医療技術が進歩したらしい。

(……才能開発で医療は発達し、警察は無力と化す、か……………?)

我ながらくだらない事を考えるものだ。

景はそう結論付け、通学路を歩く。

実を言えば、まだ景は登校中の身なのである。

いつもならば、このような思考は窓の外を見ながらしている。例外を起こすほどに、灯澄の発言は胸に残っているという事なのだろうか。

(……………そういや、今日からだっけか……………?)

カナシイヒト、と言われた後からも景は何度か灯澄の見舞いに行っていた。ちょっとした責任感から。

その中で、灯澄がそのような事を言っていたような気がする。

「蓮野くん！」

そんな事を考えているとき、後ろから灯澄の声がした。

カナシイヒト（後書き）

景の謎を知ってそうな灯澄が記憶喪失とか、マジで書き難い。
なら何故、記憶を消させたって話になるんですけどね。
当然、理由なんて無いんですけど

記憶喪失後（前書き）

何故か彼女はついて来る。タイトルなんか意味は無い

記憶喪失後

「蓮野くーん！」

（蓮野……苗字、か……）

後ろから掛けられた声に、心のどこかでもどかしさと罪悪感を感じながら、景は振り返る。

「黒笠、お前今日から学校か？」

「はい！ 友達はまだ蓮野君しか居ませんが、頑張ります！」

両拳を握り、元気な声で宣言する灯澄。景とはある意味テンションが真逆である。

部分的な記憶喪失になったのを出来るだけ気にしないようにするためか。

それともこれが彼女の本来か。

「……そうか。何か困ったときは言えよ？」

景は少しの逡巡の後、灯澄に言いつける。

「はい！ 蓮野君には遠慮しませずに何でも言います。だって友達ですもんね！」

「そうかな？」

「えっ！？ 違うんですか、蓮野君！？」

「ほら、それより早く学校に行こう。遅刻しちゃう」

「ちょっと待ってくださいー！ 蓮野くーん！」

景は少し早歩きになり、その後を彼女はついて来る。

そこまで景との距離は離れていなかったため、数十秒後には灯澄は追いつき、またお喋りを始める。

灯澄本人は、楽しくて景に話し掛けているのだろうか？

景本人にとって灯澄と話す事が苦痛である事も知らずに、話し掛けているのだろうか？

今も景は胸中にある罪悪感を押し潰し、灯澄と無理に話している事を知らずにやっているのだろうか？

(……………無理をするから、カナシイヒトなんて言われるのか……………)
いつの間にか無意識で景は、灯澄に対して偽りの表情で対応しながら自らを客観的に見ようとしていた。
無意識に、心の中で自らを客観的に見ようと、灯澄からの逃げ口を作り出していた。

「おいケイ！ ケイよ、聞いてないぜ！」

「うるさいな、最初から話を聞いてないと断定するな」

昼休みの時である。騒々しく畑沼が話し掛けてきたのだ。
特に何かを考えていたわけでもなく、ただ窓の外の景色を見ていた景は少々ムカつきながらも畑沼を宥めようとする。

「何なんだ！？ あのランクSで少し根暗そうでもうにも高飛車に見えたあの子が、記憶喪失後が可愛いぞおい！ お前が何かしたのかケイ！？」

「なんで黒笠の事でこっちに矛先が向くんだよ」

「ランクSと唯一関わりがあったのはお前だけだろ！ 矛先が向いて当然だ！」

「記憶喪失後なんだろう？ だったら関係無いだろ。こっちに矛先向けんな」

「でも入院中もしょっちゅう見舞いに行ってたんだろ？」

「……………誰が言ってた？」

当然、景がそんな事を誰かに言うわけが無い。というか相手がいない。

第三者に見られた、という可能性がある。誰かが灯澄の病室を見張っていたという可能性。

となると、また暗殺者の可能性が——、

「いや、黒笠灯澄本人が言ってたぞ。嬉しそうに」

「よし。ぶっ飛ばすか」

「なんだよケイ。ジャイ○ンのポジションでも目指してんのか？
普段の対応は冷たいけど、道端に捨ててあったりする小動物とかに
は優しいっていうポジション狙ってんのか？」

「んなわけねえーだろ。さらに余計な矛先が向かう前に――」

「ねえねえ畑沼君」

どうにか景を席に座らせて女子生徒殺人事件を防ごうと努力している時、横槍をいれるようにクラスメイトの女子が畑沼に話し掛けてきた。

「んー、何？」

「蓮野君と黒笠さんが付き合ってるって本当の話なの？」

目を輝かせながら聞いて来る女子生徒。

「違うと思うよ、本人否定してるし」

「そっかぁー……………残念」

そう言い残し、女子生徒はどこかに行ってしまった。

愛想笑いを浮かべながら景の姿を見る畑沼。

景は、窓の外を見ながらいつにもまして黄昏ていた。雰囲気はまるで賢者や仙人のように強制的に周りの空気が静まっていた。

「お、おい。ケイ？」

「何が、残念なんだろうな？」

「それは、興味本位の発言だから意味は無いと思うけど」

「そうか。人生に意味なんて無いのか」

「自殺だけはやめろよ、自殺だけは」

「するわけないだろ。それこそ完全敗北の象徴じゃないか。なんで黒笠ごときに負けなきゃいけないんだ」

「ははは……………」

畑沼は愛想笑いを浮かべたまま、景のもとを離れて行った。

（記憶を無くしたら……………性格が変わるのかねえ……………）

窓の外の変わり映えのしない景色を見ながら景が考えていた事は、灯澄のことではなく、自分の事だった。

あの事件の時、激しい頭痛の後、自分の中の何かが弾けて少しばか

り変化していた事は景も自覚していた。

無能修正の使用法を思いついたのも、激しい頭痛の後。

どこからか《声》が聞こえてきたのも、激しい頭痛の後。

頭痛の原因は、分らない。

(……………もしかしたら、自分も……………)

そんな思考に回ってしまったが、景はすぐにその考えを捨てる。

事件後、景は一人称を使う気がなかった。

そもそも一人称なんて無意識に使うものだし、景もあの時は無意識にオレと言っていた。

しかし事件後、どうもオレと言うのに抵抗が出来てしまっていた。

もしも景も記憶喪失で、あの事件の時に一時的に記憶が戻りまた元に戻るのは、少し納得がいかないものがある。最低限、景は納得がいていなかった。

(……………あの時の黒笠は、少なからず何かを知っていたようだが……………)

もう灯澄にはあの事件以前の景と関わった出来事すべてを忘れている。

自らの手で、ナゾナゾのヒントは断ち切ってしまった。

(……………チッ……………)

釈然としない気持ちに内心、舌打ちをし、景は席を立ちあがる。

別にどうという事は無い。ただ昼食を教室では無い所で取ろうと考えただけだ。

黒笠灯澄のいないどこかで、ただ昼食を取りただけだ。

記憶喪失後（後書き）

すっかり忘れてましたが、一応感想などあれば書いてください

屋上（前書き）

夕、イ、ト、ル、な、ん、か、に、意、味、は、無、い

屋上

蓮野景は屋上にいた。

（……鍵穴ぶっ壊したけど、まあバレなきゃ大丈夫か……）

片手にはビニール袋を持ち、今からここで昼食を食おうとしているわけだ。

フェンスに体重を預けるように凭れ込み、街の風景を眺める。

しばらく風景を眺めた後、袋からパンを取り出そうとし、

「早まっちゃダメですうー!!」

不意に後方からきた衝撃に咳き込む。

「けほっけほっ……何すんだ、黒笠」

「ダメです蓮野君、早まっちゃー！ なにか悩み事が有るなら、あたしが聞きますからあー！」

「離せよ、黒笠。暑苦しい」

腰に回された灯澄の腕をどうにか振り解いてから何を勘違いしたかを聞こうと思った景。

しかし景はよく分からないが自殺しようとしていたと思っていたる灯澄からしてみれば、それは勘違いを増大させるだけの行動であって……。

「絶対にダメですうー！ 離しませーん!!」

「いい加減にしろよ、黒笠」

（10分後）

「す、すいません！ あたしはてっきり蓮野君がそのあの自ら命を断とうなんて考えてしまったのだと……」

「分かればいい」

フェンスの近くに腰を下ろし、コンビニおにぎりを頬張りながら景

は言う。

灯澄は先程からペコペコと頭を下げるばかりで自分の昼食に手をつけていない。

「……それで黒笠。お前は何で屋上に？」

「ああ、その、ええーと……………」

「時間はある。弁当でも食いながら話せよ」

「そ、そうですね」

灯澄は景の近くに腰を下ろし、弁当を開き、食べ始める。

しばらく互いに口を交わさなかったが、最初に話し掛けてきたのは灯澄だった。

「あ、あの……………蓮野君は、あたしの事がその……………嫌いですか？」

「何で？」

「い、いえ……………その、蓮野君はあたしとお喋りしてる時、顔が暗いですから」

「そうか？ いつもながらのポーカーフェイスだと思うけど」

「なんとなく、ですけど暗いですよ。いつも」

しょんぼりとした様子で灯澄は言う。

景はそんな灯澄を見て、少しばかり言葉を選んだ後、

「そうだな。黒笠の事が嫌いだ」

「ッ！ そ、そうなんです……………か……………」

「まあ、嘘だが」

「ほ、本当ですか？」

「いや嘘だ」

「ど、どっちなんですか！？ 蓮野君、本当の事を言ってください」

「本当の事を言うと、別に黒笠なんて眼中に無かった。存在すら知らなかったよ。まったくもって、どうでもいい」

「一番酷いです！」

今の灯澄は遊び甲斐があると景は少し思った後、今度は真面目に答える事にした。

「前まで黒笠は、蓮野君じゃなくて景って呼んできてたからな。本

当に記憶が無くなってしまったんだなーって」

そして記憶を消したのが自分なんだという罪悪感に苛まれる。多分、その多少の罪悪感が自分の表情を暗くしてしまっていたんだ。

景の独断であるが、それが本当の理由であろう。

それしか思い当たる節が無かった、というのもまた事実だ。

「そ、そうですか……やっぱり、あたしのせいでしたか」

「やっぱり？」

「蓮野く……か、かかか景が――」

「無理して名前で呼ぼうとしなくていいぞ」

「うう……すいません。で、その蓮野君が最初にあたしの病室に来た時があったじゃないですか」

「ああ、あったな」

ビニール袋の中に入っていた物全てを食い終わってしまった景は、灯澄へ視線を向けながら続きを待つ。

「その時にあたし、無神経な事を言っちゃったじゃないですか……
……その……カナシイヒトって」

「ああ、言われたな」

「それがその……原因で、蓮野君はあたしの事が嫌いなのかなあー
って思っただけですけど……」

「いや、実際言われた時に傷付いたし、今でも死にそうなくらい悩んでいる」

「そ、そうなんですか！？　そ、それは本当に失礼な事を……すいませんでした！」

「いや別にいいよ。多分、言われた理由もわかったし」

景の言葉に灯澄は眉をひそめたが、深くは問わなかった。

（結局……記憶を消した事を本人の前で気にしてるってわけか……
……気にするんなら最初からやらなければよかったのに）

あの状況なら、べつに記憶を消す以外の選択肢もあった。

しかし、あそこまで人の精神をすぐに簡単に壊してしまうような記憶は消してしまった方が楽だろう。本人のためにも。

景なりの他人への優しさが、景本人を苛ませる。

「ともかく黒笠の事は好きでも嫌いでもない。というか眼中にない。どうでもいい存在だから安心しろ」

「それは安心していいんですか!?　むしろ嫌いと言われた方がマシな気がします!」

「なら嫌いだ。黒笠の事は嫌い。これで満足か?」

「うう………蓮野君は、酷い人なんですネ……」

「違う。カナシイヒト、なんだろう?」

「本当に酷いですよ!　そこまであたしを苛めて何が楽しいんですか!?!」

「イジメじゃない。自意識過剰っていうんだぞ、お前みたいな」

「うう……もう、あたしも蓮野君のこと嫌いです!」

そう言って、灯澄はそっぽを向きながら弁当を貪り始めた。自棄食いだろうか。

その後、しばらく無言の時間が続いたがそれを破ったのは景だった。しかし景の口から出た言葉は上っ面の謝罪ではなく、

「好きだよ黒笠——」

「……………ふえ!?!」

「——嘘だけどな」

虚偽妄言の上っ面な告白だった。

屋上（後書き）

マンネリしてるんだけど、次話は動き出します
多分、いや絶対……だといいなあー

護衛（前書き）

タイトルなんか意味は無い

護衛

「好きだよ黒笠——嘘だけだな」

「なっ……………ははは蓮野君！！何をいきなり……………しかも嘘って！」

「いやだって、本心を言う興味が無いけど、なんとなく可哀想になったから」

「無駄な同情はやめてください！余計に傷付きますからあ！」

「そうかそうか、それは良かった」

「極悪非道の最低人間ですね、蓮野君って！！」

景の態度と言葉にムカついて、灯澄は弁当の残りを大雑把に自分の口へかき込む。

「おい、そんなに急いで食べてたら咽るぞ」

「うるはあいです！蓮野くけほっけほっ」

「言わんこっちゃない」

咽る灯澄の背中を叩きながら景は溜息を吐く。

「うう……………なんか胸の辺りがまだ苦しい……………」

「無い胸が苦しいわけないだろ」

「ッ！！ち、ちゃんとあたしだって胸は有りますよ！」

「分かった分かった。ともかく、ほら。これで飲み物買って来い。まだ詰まってる感じがするんだろ？」

「蓮野君の奢りですか？それとも利子を付けて返せとか——」

「闇金じゃないんだぞ、おかしい事言うな。あとでお前の分の料金は請求するけどな」

渡した千円札を怪しそうに睨み付ける灯澄に、呆れたように諭す景。

「あ、そういう事ですか。それじゃ、あたし飲み物買ってきますね」

「おう、さっさと行って来い」

「…………蓮野君、勝手にどっか行かないでくださいよ？」

「行かないから、早く行って来い」

手で払い除けるような仕草をしている景に灯澄は手を振り、屋上を後にする。

自分以外、誰も居なくなった屋上でしばらく空を仰ぎながら景は一人物思いにふける。

(……無駄な同情は余計に傷付くだけ、か………)

景の灯澄に対する思いは、好き嫌いの二元論では片付けられない。同情。

灯澄の記憶を消してしまった事に対しての同情。

結論を言えば、景は灯澄を可哀想だと思って接し、話し、ふざけ合う。

景の灯澄に対するどの動作を取っても、同情が根源に存在する。

灯澄からの好きか嫌いかの問答。それに答えるには、あまりにも曖昧で適当な存在が邪魔をする。

好きだから同情するのか、と問われれば景は「違う」と答えるだろう。

嫌いではあるが罪の意識から同情するのか、と問われれば景は「違う」と答えるだろう。

結局の所、中途半端。罪悪感が素の同情だけが灯澄という存在を他と隔離している。

大してどうでもいい他人とは別の認識に存在させている。

つまりは、道端にある砂利の中から一つだけ石に印をつけたような事。その印をつけた石を他より少し意識しているだけという事。意識しているだけで、結局は他の石と変わらない存在という事。

(………本当に、中途半端だ………)

景は灯澄の記憶を消す時に言った。

『オレがお前の不幸を背負うから』と。

しかし、自覚している。

(……背負いきれてない、余計に黒笠を傷付けている………)

いくら灯澄を大切に思っても、それは偽りの感情でしかない。

そして景にはいつまでも偽りの感情を保ち続ける自信が無い。いつ

までも自分を騙しきれる自信が無い。

いつかは自分が何もかもを放り投げて、勝手に自分の中で解決してしまう気がする。

(………もっと、他人よりも自分を誤魔化せる人間だったらよかったのに………)

自分を誤魔化し、罪に何も感じず過ごせる人間である事は、景には不可能だった。そんな才能は景には無かった。

騙し続ける才能も罪に何も感じない才能も無い、無能者。ランクX

そんな自分が持っている才能である〈無能修正スキルメイカー〉。

(……皮肉かよ。よりもよって無能を修正するなんて………)

一時的に才能を創り得る変異系才能。正確には、相手の才能を元に創り直した能力を一時的に自分の能力とする変異系才能。

この才能は他人の真似事とは違う。複写ではなく修正。

相手と同じになる事は決してない。つまり誰かと同じ道を歩くことを禁じられている才能。

詐欺師を見ていたとしても、詐欺師にはなれない。

殺人鬼を見続け心理や行動を研究したとしても、殺人鬼にはなれない。

例えばどんなに自分が何かになりたいと憧れたとしても完全に憧れた者にはなれない。そういった才能。

(………ああ、複写コピーの才能だったら良かったのに………)

くだらない、在り得もしない事を漠然と考えながら、彼は空を仰ぎ続ける。

そして、気付く。

「……黒笠の奴、遅くないか？」

独り言のように呟き、景は立ち上がり屋上を後にする。

(……教室にもいない、か………自販機の間所が分からないって

事か？ 黒笠は聞いて来なかったからてっきり知ってるとばかり思ってたが……………)

階段を下りながら、景は溜息を吐く。

単純に景の事を忘れて勝手に教室に戻っていたら、搜索は楽だった。しかし教室に灯澄の姿は無かった。故に今から自販機が置かれてある場所……昇降口の近くに寄るわけだが、いる確率は少ない。

さらには景が屋上から動いてしまった事により、灯澄とすれ違いになる可能性すら生まれてしまっている。

(これは昼休みが終わるまで、見つからないかな……………)

校内の中で迷子とは、と溜息を吐きながら景は踊り場から外を見る。そして見つけた。灯澄を。

中庭で挙動不審のようにキョロキョロと周りを見ながら歩いていた。(……………まあ、外に自販機が有るって発想しちまったんだろうな……………)

急いで外に出ようと景が動き出そうとした時、ちょうど灯澄の方も行動を起こした。

というか走り出した。何を考え付いたのかは景には分からなかったが、一方向を見た後、血相を変えて反対方向に走り出していた。

(何が……………?)

灯澄が走り出す前に見ていた方向へ景も視線を向ける。灯澄と同じ視点では無いが何かしら見えるだろう、と考えたのだ。

その方向から、何名かの生徒が灯澄を追いかけるように走ってきた。

(……………追われてる!?)

自然と景の体が動き出していた。

この前まで灯澄は暗殺者なんて物騒なものに襲われ続けていた。

それがたかが本人の記憶が消えた程度で終わるとは限らない。いや、終わる理由には適さない。

そして景と灯澄が初めて出遭った日、景が見たのは制服を着た死体。(……………つまりは学生のふりをした暗殺者!)

景の頭の中で繋がった何かが、体をより一層強く動かす。

階段を下りながら、灯澄の逃げ出した方向を脳内でマッピングする。校舎全体の図は必要ない。前後左右の四方向のどれへ向かったのかすら分かればいい。

1階へ着くと同時に景は脳内マップに従って全力で走り出す。

（……追っていた奴ら全員が才能者^{タレント}なら〈無能修正〉で対応すればいい。数的には負けているが勝つ必要は無い。灯澄が教師とかの元へ辿り着きすらすれば、追ってる奴らも攻撃がしにくくなる。一時的だが、殺害を延長できる……）

灯澄の元へ走りながら、策を練る景。

しかし、その策は灯澄の元へ辿り着くと同時に無と化する。

もうすでに手遅れだった、という意味では無い。

そもそも灯澄には、自分に向けられた攻撃の対象をすり替える才能、といった盾がある。

しかし記憶喪失後で発動するかどうかが分からない。もしかしたら発動しないという事態があるかもしれない。

だがそんな、在り得たかもしれない未来、なんてものは関係無い。

景が灯澄の元へ辿り着いた時、事態はすでに終わっていた。

灯澄の才能ではなく、他の者によって。

「誰だよお前……？」

景と同じ西宇津理学園の制服を着た外見的特徴が少ない、いうなれば模範的な男子生徒。

しかし直感的に、自分と同じ学生では無いと景は認識した。

「護衛の者ですけど、何か？」

男子生徒……らしき人物が景に視線を向けながら問う。

何かもクソもあるか、というのが景の感想だった。

模範的な男子生徒を直感以外で学生では無いと見分ける方法が、足元には転がっていた。

うめき声を上げる重傷者たち。先程、景が窓越しに見えた何名かの生徒であった。

護衛（後書き）

一応、進んだと思うんだけどな章的には。

ああ、ネタバレで評価が下がった……orz

どうしよう。こいつまだ名前まだ決めてないんだけど……

逃げ（前書き）

タイトルなんか意味は無い

逃げ

「護衛ですけど、何か？」

黒髪を中途半端な長さで切り、顔には特にこれといった特徴も無く、身長は167程度の中肉中背。

絵に描いたような模範的な学生のような人物の足元には何名かの生徒がうめき声を上げながらのた打ち回っていた。

(……こいつが全員一人で………?)

ゆっくりと無意識のうちに景は身構えていた。

敵ではない、と相手は言っているようなものだ。しかし何故か本能的に警戒してしまっている。

「あ、蓮野君！ そのこれは、ええと、そのですね………」

灯澄が景の姿を確認し、慌てふためく。

一応、灯澄は自分の命が誰かに狙われてる事を景が知らないと思っているようだ。

「誤魔化さなくても良いみたいですよ。この男は知っているみたいです。つまり………」

学生のような人物はそう言うと同前へ一步踏み出してきた。

自分の内側の何かが弾け、景は本能的に右腕で何かを受け止めた。

(熱い……ッ!?)

直後、右腕に熱した金属類が当てられ神経が溶かされるような感覚に、景は飛び退く。

右腕には手形のような白い痕が残り、熱が痛みに変わっていく中で学生のような人物は言葉の続きを言う。

「敵か、記憶を消した野郎のどちらかって事ですよ」

「……大正解だよ、クソツタレ」

痛みを堪えながら、景は学生のような人物を睨み付ける。

(……才能での攻撃である事は間違いない。身体能力は普通以上っぽい、注意していれば攻撃は避けられる。あとは何の才能かが分

かれば――――」

「は、蓮野君……？　　どういう、事なんですか？」

景の思考を遮るように、灯澄が問いかけてくる。

しばらくの間、景は逡巡し、そして正直に真実を伝える事にした。

「黒笠灯澄の記憶を消した人物は、蓮野景だった。それだけだ」

「何で……あたしの記憶を消したんですか？」

「その時の気分だ。消したい気持ちになったから消した」

「何で、記憶を消した人の所へ何度もお見舞いに来たんですか……？」

「思い出されては困るからな。一種の監視だ」

「何で、あたしと喋ってたんですか？　監視だったら、そんな事をしなくたって……」

「こちらが親切にお前へ対応したら、記憶が無くなった直後の人間なら少なからず信頼するはずだ。信頼していた人物が記憶を消した事を思い出せば、態度に出る。これでお前が記憶が戻っても誰にも話さずに隠していたとしても、見分ける事が出来る」

「……蓮野君は、あたしに嘘を吐いたんですか？　嘘の態度で接してきてたんですか？」

今にも泣きそうな顔で、灯澄は最後の希望をかけながら景に問う。その表情を見ても、景は逡巡する事なく真実を言う。

「ああ、黒笠に嘘を吐いた……嘘の態度で接していた」

「……………」

灯澄は突如、走り去り、どこかへ消えてしまった。

沈黙が空間を支配する。景の胸で何かが突っかかる。

「嘘八丁が上手い事で」

学生のような人物が景に向かって称賛の言葉を言う。

ああそういえば二人だけじゃ無かったんだな、と思いながら景は視線を向ける。身構える事はもうしない。

相手から敵対の意思が感じられなかったからだ。

「どこまで知っていた？」

景は学生のような人物に問い掛ける。

「依頼者から聞かされたのは、黒笠灯澄の記憶を消したのは敵側とは違う人物、という事だけです。それ以上は今日さっき貴方から聞いた事実しか」

「敵側……?」

「言えないですよ。一般人が首を突っ込んで良い話では無いので」
「黒笠灯澄の記憶を消したのを誰だと思ってる? 人の記憶を消すような奴が一般人だと思うのか?」

「嘘は良くない。嘘ばかりを吐くと無理をして命を落としますよ?」
景の口から次の言葉は出なかった。自分の命を懸けるほど、灯澄の事に加担しようなどとは思わなかった。

その様子をしばらく見ると学生のような人物は、景に背を向けどこかへ行こうとした。

「おい、お前の名前は?」

「樋川ひがわです。今後お会いしない事を願います」
名乗ると、樋川は今度こそどこかへ行ってしまった。

その場に一番遅れて来て、一番最後に残った景は空を見上げてどうするかを考える。

これからは灯澄の傍にはあの樋川という人物が付いている。

暗殺者に襲われたとしても、樋川なら難なく退治できてしまうだろう。

灯澄には虫食い状態の真実を伝えた。

あの言葉を聞けば、灯澄はもう二度と景には近付かない。近付く気にはなれないだろう。

逃げ出せる。

灯澄の記憶を消した事からも、自分の内側にある何かからも、罪悪感からくる同情からも。

全てから逃げ出せる。逃げ出してしまえばいい。逃げ出すべきだ。

(……………だけど、……………)

言葉に出来ない何か喉で引っ掛かっている感覚に、景はただ空を

見上げる。

見上げる事しか、出来なかった。そうやって自分を誤魔化していた。もうすでに、逃げるための一歩を踏み出していたのかもしれない。景はそんな事を思いながら、昼休みの終わりを告げるチャイムを聞いていた。

逃げ（後書き）

この前、ネタバレしたら評価を下げられたので……もう一回ネタバレを！

嘘です、すいません。許してくださいお願いします。

しばらく更新しないかもしれないんで。それを伝えたかったただけなんです

責任（前書き）

当然、タイトルなんかに意味は無い

責任

「……………蓮野くん、お話があるので…………放課後、教室で待っていてください」

またこのパターンか、と景は頭の中で思いながらも了承した。昼休みの一件から三日後の事である。

登校したての景に灯澄がそう言ったのである。

景としても、断る理由も無いので了承したが……………。

(一体…………何を言われるんだろうな……………)

虫食いの状態の真実を伝えられた灯澄がこの三日間という行動をしていたか、景は知らない。

そもそも三日間一切口を交わしてない。ストーカーでもあるまいし、景が知っているわけが無いのだ。

(…………ともかく、覚悟はしておかないとな……………)

灯澄にどんな罵詈雑言を浴びせられようが、頬を叩かれようが景はそれに逆らう権利が無い。

権利があっても行使する気が無い。出来ない。

もう逃げ始めているから。

「蓮野くん…………待たせちゃいましたか？」

窓の外を眺めていると、灯澄が話し掛けてきた。

もう放課後だったのか、と景は自分の体内時計の指針が壊れている事を自覚し、席から立ち上がる。

「いや、別に」

「そうですか、なら行きましょう」

「何処にだ？ またお前の寮部屋か？」

「違いますよ。まあ、黙ってついて来ててください」

灯澄はそう言うのと、景の手首を勝手に掴みながら歩き始めてしまう。またこのパターンか…………。

景はそう内心で溜息を吐くと、仕方なく無言でついて行く事にした。

「おい、黒笠」

「なんですか？」

「ここは……どういう事だ？」

「見て分かりませんか？ ショッピングモールですよ」

途中から……電車の切符を買わされた時点から景もおかしいとは思っていた。

景が予想していたものは、どこかで話し合いをする、と言った至ってシンプルなものだった。

しかし、灯澄はどうやら話し合う気は無いらしい。

「蓮野くんはあたしの記憶を消したんですね？」

「あ、ああ」

「なら責任取ってくださいすよね？」

「何を？ どういう風に？ どうやって？」

「あたしの欲しい物くらい買ってくださいすよね？」

「おいくらでしょうか？」

「未定です。あたしが欲しいと思った物は全部買って貰おうかなと考えているんで」

景は思わず踵を返して、今すぐに逃げ出したくなった。

しかしまるでそれを予期しているかのように灯澄はしっかりと景の手首を握っている。

「他の事で許していただけませんか？」

自分の金銭事情から考えて、相手に敬語を使う景。

灯澄は一旦無言の微笑みで返した後、息を大きく吸い、

「ええーッ！？ 蓮野くんはあたしをこんなのにしたのに責任を取ってくれないですか！？ 最低ッ！！ だから男って信用できないんですう……うう……うええーん！！」

涙を流しながら大声でそんな事を言っていた。

周囲の目線が非常に異常に気になった景は取り敢えず灯澄を連れてなるべく人がいない場所に移動した。

移動している間聞こえた、ヒソヒソとした会話の一部分が聞こえたり聞こえなかったりした景は、死にたくなかった。

「何をいきなり大声で嘘紛いな事言ってるんだッ」

「別に嘘じゃないですよ。蓮野くんはあたしをこんな記憶喪失なんてものにしたのに責任取ってくれないんですか、っていう意味ですよ。それとも記憶を消したのは他の誰かなんですか？」

「確かに間違っではないが、言い方に問題があるんだよ」

「うーん……？ あたしには分からないです」

人差し指を顎に当てながら、灯澄はそんな事を言う。その顔に先程までの涙は無い。

景はそんな灯澄の顔を見て、思わず溜息を吐く。

「それで蓮野くん」

そう言うのと灯澄は景の元に駆け寄り、下から見上げる形で聞いて来る。

「責任、取ってくれるんですか？」

「……………ああ、金が尽きたら解放しろよ」

溜息混じりで景は遠回しに了承し、それを聞いた灯澄は嬉しそうに笑い出す。

「ありがとうございますっ」

「……………そうと決まればさっさと行くぞ」

そう言うのと景は一人で勝手にどこかへ行こうとしてしまう。

「違います！ まずはこっちですよ蓮野くん」

そんな景の手を無理矢理引っ張って灯澄は笑顔のまま歩き出す。

（……………甘かった……逃げれると思っている自分が、甘かった）

この三日間で灯澄に何があったかは景は知らない。

しかしたった三日だけで灯澄は自らの記憶を消した張本人に笑顔を向けてきた。

そんな人間から逃げれると思っていた自分の甘さに景は内心で溜息を吐く。

罪悪感からくる同情など灯澄にとっては関係無い。景が嘔吐きであろうが灯澄には関係無い。

相手が気にしていないのに、自分がウジウジと悩んでいても仕方が無い。

灯澄の器の大きさに景は完敗していた。

「ところで蓮野くん」

「何だ？」

「他の事で許してくださいとか言ってみましたけど、他の事って何をするつもりだったんですか？」

「それは……」

それについて景は特に何も考えていなかった。

そもそも灯澄に考えを変えさせる為のもので、景が考える必要は無かった。

「……あたしが一生守って欲しいと言ったら、守ってくれたんですか？」

「まあ、そういう事になったんだろうな」

「惜しい事をしましたあ……………」

「ん？」

どんよりとした雰囲気をつくりと項垂れている灯澄の様子に、景はただ眉をひそめる事しか出来なかった。

責任（後書き）

蓮野君が蓮野くんになったのは使用です……ってそんな事は気にしないよね

あと俺は嘔吐きなんで更新しないと言っても大概は更新したりしちゃいますよ

本心（前書き）

タイトルなんか意味は無い

本心

「やあー、いっぱい買いましたねっ!」

「お蔭で財布の残りが、帰りの電車代と同じ額になったがな」

ショッピングモール内にあるカフェテリアにて、両手一杯の紙袋を隣の椅子へ置き直した景が言う。

「ちゃんと責任取ってくれましたね!」

「ああ、これで良いんだよな?」

「何言ってるんですか?」

「……………」

灯澄の言葉によって完全停止した景に追い打ちをかけるように、さらに一言。

「まさかこの程度で人の記憶を消した責任が取りきれとは思ってませんよね?」

「…………これ以上、何をしろと?」

「本当の事、話してください」

景の瞳をまっすぐ見つめ、回答を待つ灯澄。

十数秒の沈黙の後、景は条件を付けた。

「取り敢えず、飲み物奢れよ。金が無いんだ」

「真相はこの前、話した通りだ。それ以上の事は何もない」

灯澄からコーヒーの入った紙コップを受け取りながら景は言う。

「なら、詳細に話してください。あんな曖昧な説明じゃ納得いきませんから」

景と対面の席に座りながら灯澄は言う。

「……………」

「何で黙るんですか? 詳細を話すとまずい事でもあるんですか?」

「…………まあな」

「じゃあ、この前言ったことのどこまでが本当の事なんですか？」

「全てだ。曖昧ではあるが、言ったことは全て真実だ」

「記憶を消したのが蓮野くんって事も」

「ああ」

「気分で記憶を消したって言うのも」

「ああ」

「お見舞いに來た理由が監視っていうのも」

「ああ」

「あたしに嘘の態度で接していたっていうのも」

「ああ。全て真実、本当の事だ」

コーヒーを啜りながら景は答える。

灯澄は少し視線を落としてから、もう一度まっすぐと景を見つめ問い質す。

「嘘の態度って、どういうのですか？」

「……………は？」

「いえ、だから、その……嘘の態度っていうからには、気になるじゃないですか」

「何が？」

「だからっ、どの態度が嘘の態度だったのかが気になるんです！

答えてください」

「全て。お前に接してきた態度全てが嘘の態度」

「にゃッ！！……………にゅう……………」

間髪入れずに放たれた景の言葉に、灯澄はショックを受けた後、徐々に徐々に縮こまっていく。

「黒笠、お前は多分本心で接してきてくれた。だけど、こっちは本心で接してこなかったんだ」

「あ、なんだその程度」

縮こまっていた灯澄は一瞬にして元に戻ってしまった。

「まさか蓮野くん、その程度で嘘の態度うんぬん言ってたんですか？」

「ん？ ああ、そうだけど？」

「それなら皆、嘔吐きですよ」

景の言葉を、灯澄は笑いながら否定する。

「人は皆、最初から本心で他人に接する事は出来ませんよ。だってそんな事をしてたら大事な人が分からなくなっちゃいますから」

「大事な人が分からなくなる……？」

「うーん……簡単に言うそうですね……二人だけの秘密とか出来なくなっちゃうんですよ。二人だけ、特別な人だけに見せれる自分とかが有っても、あたしは構わないと思うんですけどね」

「だけど黒笠、お前は本心で接してきて」

「だってそれは蓮野くんがあたしにとって特別な人だからですよ」

「特別……？」

「記憶を失ったあたしに一番普通に、今まで通りに接しようとしてくれた最初に出来た友達ですもん」

「……………」

バカらしい、間違っている。

景はそう思った。

灯澄は、本心を明かすのは大事な人だけで良い、と言っている。

つまりは一番最初は誰もが他人に本心を隠して接していると言うことだ。

間違っていない。むしろ当たっているだろう。

だけど景と灯澄は初対面じゃない。最初からずっと景は本心を偽ったまま接している。

それに対して灯澄は、景のことを友達だと言って、本心から接してきている。

間違ってる。いつ自分が灯澄の友達になると言っただ。

よりもよって自分が傷つけた相手が、自分の事を友達だと言ってくるなんて……間違っている。

「でも意外でした。景って案外、素直で優しい人だったんですね」

「んなわけ無いだろ」

コーヒーを一気に飲み、中身が無くなった紙コップを握り潰しながら景は言う。

「黒笠と友達になった覚えはないし、素直で優しい性格になった覚えもない」

「でも事実そうじゃないですか」

「どこが」

否定し続ける景に、灯澄は呆れたように言う。

「お見舞いに来て、誰かに追いかけていればその場に走ってきて、両手一杯の紙袋の分だけあたしに買ってくれて、自分が本心から接していない事にちよつと罪悪感やら感じている人が素直で優しく無いなんて事は有り得ないと思うんですけど。まあ確かにあたし達は友達じゃないかもしれませんが……」

言い終わりに少し灯澄はしょんぼりしていた。

景は灯澄の言葉を自分の頭の中で、整理し、再度考え、結論を出す。

「……もう日が暮れ始めてる、さっさと帰るぞ」

「そうですね」

景は席を立ち、それに釣られて灯澄も席を立つ。

景の中で結論として出たものは、結局自分は記憶を消したことでなおさら黒笠に付き纏われる、というものだった。

逃げようとしたって逃げられそうにない。それが景の結論だった。

「おい黒笠、明日からは本心から接する事に決めたから」

「本当ですか？ 信じられません」

「別に信じなくてもいい。勝手な独り言だと思ってくれて構わない」

「なら、あたしも明日からは今まで通りに接しますね。これはあたしの独り言ですから絶対に無視してください」

「大丈夫だ、安心しろ。明日から黒笠を無視するのは予定済みだ」

「酷いっ！ 明日じゃなくてさっきの独り言を無視してくださいって言ったんです！」

「今から無視していいのか？」

「……つまり蓮野くんは今現在あたしをウザいって思ってるんです

か？」

「よく分かったな、新たな才能か？」

「本当に蓮野くんは酷いですう！！」

灯澄がそう言うのと同時であった。

目の前に人体が降ってきたのは。

本心（後書き）

グダグダ街道まっしぐら、って感じの文章ですよね今回の。
やっぱり一つの物を書いてる時は他の物を書かない方が良いわ。
取り敢えず、多分次回からバトりますよ。多分ですけど

再会？（前書き）

タイトルなんか意味はない

再会？

「ッ！ 邪魔です！」

目の前に上から人の体が背中から降ってきた。

腹部には誰かが乗っていて、人体が地面に落ちると同時に景を跳ね飛ばし灯澄の傍に寄る。

いきなり跳ね飛ばされた景は、数秒、自分に何が起こったかを整理し、ブチ切れる。

「何すんだよ樋川ア！」

「威勢が良いですね。うるさいですね。少し黙ってくれませんか。というか邪魔です」

三日前と同じ、制服姿のまま樋川は景を罵倒する。

「ムカつく言い方だなあ……さっきの爆発はお前がやったのか？」

「違いますよ。貴方と同じクソゴミ……ではなく敵側がやったものです。まったく、ド派手にブチかましてくれて迷惑極まりない」

「思うんだけど、喧嘩売ってんだよなあ？ 今すぐぶっ飛ばして良いんだよなあ？」

「舐めた口を叩いてると、返り討ちにしますよ？」

「二人ともっ！」

睨み合いを続ける樋川と景を仲裁するため灯澄が割って入った。

「落ち着いてください……樋川さん、その人は？」

「敵の一人です。残りは二人。今すぐにでも潰しに行きたいんですが、貴女の護衛が最優先事項なので」

「はあ？ 黒笠には絶対防御が自慢の才能の壁があるだろ」

「それをブチ破った本人は知らないんですか？ まだ黒笠灯澄は才能を使えません」

「す、すいません……」

景は樋川の発言に驚き、灯澄は少し申し訳なさそうに縮こまる。

「……そういえば、貴方の才能は何なんですか？ 黒笠灯澄の才能

をブチ破った程だから――」

「オレの才能は、ランクXの――」

「クズですか」

「勝手に決めつけんなあ！」

「二人ともっ！」

何故この二人はこんなにも仲が悪いのだろうか……？　と疑問に思
いながらも灯澄はまた仲裁する。

「ともかく移動しましょうよ。ここじゃ危険だと思うんです」

「確かに。貴女とクズの二人は才能が使えませんか」

「絶対に後でぶっ飛ばす」

三人は近くにあった、女性用の洋服店に潜入し、作戦会議を行う。
まず最初に、景は樋川へ自分の才能を説明した。

「……つまり、クズの才能は紛い物のコピー能力ということですか」

「まあ、簡単に言えばなあ」

「使い物になりませんね」

「ズバリと言うなあ」

「ただのコピー能力なら、相手と同じ使い方をすれば大体は使える
んですから良いですけど、貴方の能力は相手の才能が分かった上で
意識的に作り変える必要がある」

「それは、大変ですね」

「自分の才能を得意げに話すバカもいますけど、あくまで稀にいる
程度です。自分の才能に自信が無い奴らは才能を隠して戦うのが定
石です。確実に分かるまでに時間が掛かる。それに分かったとして
も次は作り変えるのに時間を要する」

「いや、多分だが作り変えるイメージが強ければ一瞬で作り変えら
れる……とは思う」

「才能者^{タレント}と戦うのは……黒笠灯澄の件が初めてですよね？」

「ああ。あの時に二回、才能を使用した」

「それしか才能を使っていないという事ですか……まあ、仕方が無いでしょう。あくまで一般人ですから貴方は」

「まあなあ」

「そうだ。いっその事、今この場で逃げたらどうですか？　楽ですよ逃げるのは、悔いるだけで済みますから」

「そうですね。蓮野くんは巻き込まれた形だし、相手の狙いはあたしだし、きっと安全に逃げられますよ！」

「黙って話を進めろ。時間を無駄にする気は無い」

「蓮野くん……………」

遠回しに逃げる選択を否定した景。灯澄はどこか悲しそうな表情を浮かべた。

樋川は景の言う通りに話を進める。

「なら囧になってください」

「敵を一人一人にするためか」

「その通り。多分ですけど相手は、こちら側から誰か……まあ言うてしまえば俺が出て来て、黒笠灯澄の護衛が居なくなるのを待っています。ですから俺のフリをして外で敵を釣ってきてください」

「だが最悪、速攻でぶっ飛ばされてお前が二対一で不利になるぞ」

「大丈夫。貴方には才能があるでしょ。どうにか踏ん張ってください」

「無茶苦茶だなあ」

「相手はぶっちゃけ強いですし、三人のうちの一人は奇襲の不意打ちで倒したようなものです。マンツーマンでも勝てるかどうか」

「そこまでかよ……」

「まあ俺も何の対策を持たせずに貴方に行かせるのは無謀だと思うんで、少しは教えますよ」

「何を？」

「才能者タレントとの戦い方」

「—————という位ですね。それじゃっ、さっさと出てけクズ」という一言と共に洋服店を追いつかれた景は、いつの間にか人のいなくなったショッピングモールを歩いていた。

（……何だ？ おかしいだろ、人が降ってきて救急車が呼ばれたりしたら、むしろ人が集まるだろ………そもそも）
洋服店内で、人の姿を見たか？

答えなど当然決まっている。見ていない。居なかったからこそ、あ
あいう話が出来た。

しかし、不自然だ。

廃墟の様に、人の気配がまったくしない。ショッピングモールだと
言うのに。

あり得ない。これは確実に、

（才能者^{タレント}の仕業……敵か？）

絶対にそうとは言い切れない。

景と同じように、巻き込まれた才能者^{タレント}がいる可能性だってある。

その才能者^{タレント}が、無駄な気を遣わせて人を掃った可能性だってある。

「ん？ ああ、景君じゃないか」

人のいないモール内で声が反響し、どこから聞こえたのかは分
からないが、景を呼ぶ声がした。

「こっち、こっち。後ろだって」

声の言う通りに景が振り返ると、数メートル後ろで30代前半の男
性が微笑んでいた。

男性は言う。

「久しぶりだね、景君。君の記憶を消した時以来じゃないかな？」

再会？（後書き）

ほらバトラなかった。すいませんでした。俺の責任です。

依頼変更（前書き）

タイトルなんか意味は無い

依頼変更

「……誰だお前？」

「まあ覚えてないのも無理はないよね。っていうか覚えてたら、それもそれで問題だし」

対峙する、景と30代前半の男性。

男性の片手に気絶している何者かの襟首を掴んでいる。

「そいつは？」

「僕の大事な娘にちよつかい出そうとしていたからね、軽く眠らせて上げたんだよ」

敵意のない笑顔を景に向けたまま、男性はそう話す。それがかえって不気味であった。

「お前、名前は？」

「黒笠霧雄きりおだよ。またよろしく、僕と同じ修正者リメイカーさん」

「同じだ？」

男……霧雄の発言に景は一々眉をひそめる事しかできなかった。

「僕の才能は〈想起修正メモリーリメイカー〉。人の記憶を……もつといけば人格を作り変える能力だよ。作り変える才能者同士、よろしくね」

「人格を作り変える……」

嫌な予感が景の中に走る。

一人称がいきなりオレに変わってしまう、分らなかった才能の使い方を理解する。

『久しぶりだね、景君。君の記憶を消した時以来じゃないかな？』

矛盾は一つ。理解できないことは一つ。引っかかる点の一つ。

変えられる前の元の人格は、一体どうなる？ 《声》として現れるのか？

「お前は、オレの記憶を消したのか……？」

聞くまでもないこと。しかし景は確認せずにはいられない。

この男は、記憶を消す前の灯澄以上に自分のことを知っている。

逃げないならば、徹底的に炙り出す。

「わざわざ聞くの？ 時間の無駄だよ」

「いいから答えろ」

「作り変えたよ、君の記憶を」

睨みつけながら問い質す景に呆れた様子で霧雄は答える。

景の質問はまだ続く。

「人格ごとオレを作り変えたとして、その前の、作り変える前の人格はどうなる？」

「どうもならないよ。上書きされるのと同じ、跡形もなく修正される」

「……例外は？」

「僕がわざわざそう仕掛けた時くらいかな」

「わざわざ……？」

また景は霧雄の言葉に眉をひそめる。

霧雄は間髪入れずに景の聞きたいことを答える。

「ある条件において一時的に作り変える前の人格に戻ることがあるように設定できる、って僕が言ったら信じるかい？」

「ある条件……」

「まあ僕は世界の裏側で、色々な大きな不幸を修正するように立ち回っているからね。一つの陰謀に君は巻き込まれたってわけだ」

「？」

「分からなくて良いよ。できれば一生解らないままの方がいい——まあ限りなく無理だろうけどね」

「?? おい、どうい——」

居ない。

先程まで目の前で微笑みかけていた不気味な男はいつの間にか居なくなっていた。

「これ以上は、時期が来たら教えてあげるよ」

背後。

目の前からいつの間にか居なくなった霧雄は景の背後で、背を向け

て立ち去ろうとしていた。

「これは……」

メモリーリメイク

「〈想起修正〉。記憶をまるごと作り変える才能だからね、背後に回られた記憶を正面で話していた記憶にすり替えたりする事もできる。君じゃ僕を捕まえない」

「なら――」

スキルリメイク

「〈無能修正〉で僕の才能を作り変えて応戦するかい？　まあ僕の才能がなんだかわかっていればの話だけど」

「そんなの……」

思い出せない。

ど忘れをしたかのように、とっさに出てこない。霧雄の才能に関する記憶が。

「言っておくけど、人の認識した過去はすべて僕の支配下だ。そう簡単に僕には届かない」

「……ッ」

景が何か手がないかを考えているうちに霧雄の姿はいつの間にか消えていた。

格が違う。今のままでは立ち向かうことすら出来ない。

結局、自分は無能のままか。

「ああ、そうだ。僕は過保護な親だからね」

自分の無力さに落ち込んでいた景に、どこからか声が話しかけてくる。

「灯澄ちゃんをちゃんと守りたいわけだから、樋川には依頼の変更をしたんだ」

話の辻褄が合っていないんじゃないか？　と景は思った。

灯澄をしっかりと守るために樋川は護衛に付けられているんじゃないのか？

それとも、今までは監視の役を密かにしていて、護衛の任に変わったという話を話しているのか？

「護衛の任から、監視の任へ」

完全に矛盾した。

監視では守るには適していないのでは無いだろう。

「まあ正確に言えば、灯澄ちゃんと完璧に守るために軟禁して監視しろっていう依頼に変更したんだよね」

「っ!？」

「簡単にいえば、黒笠灯澄の自由を奪って守り抜けという依頼なわけさ」

「デメエ……ッ!」

虚空に向かって、景は威嚇するように呟く。

「依頼変更後にちようどよくこんな事が起っちゃったからね、事態は急を要すると認識するだろう。灯澄ちゃんにお邪魔虫のように付き纏っている景君は今ちようどココにいるし。あとは敵を一人倒せば、灯澄ちゃんを拉致って任務完了かなー?」

「ふざけやがって!」

「怒ってる怒ってる。でもこんな場所で叫ぶだけで止まっちゃうのかなー? 早くしないともう一生、灯澄ちゃんには会えないよ」

「糞ッ!」

来た道に戻りだした景に霧雄の声は纏わりついて来る。

「お、走り出した。でもでも、どうして走り出すのかな? 灯澄ちゃんを守るため?」

「わざわざ聞くなあ、そんな事!」

「守るのかー頑張れ頑張れー。でも、その気持ちはどっちなんだい?」

「あ?」

「同情なのかなあ? それとも本心なのかなあ?」

「……うるせえなあ、黙ってろよ」

走る速度を増しながら、声に向かって当てつける。

「中途半端な思いと覚悟で、樋川には勝てないと思うんだけどなー」
「いつまでも、中途半端でいる気はねえ」

宣言後、景はさらに速度を増し、声を振り切る。

灯澄を守るために、灯澄の元へ駆けていく。

依頼変更（後書き）

ちよつと雑談なんですが。

今回出てきた黒笠霧雄が仮に……というかマジで灯澄の父親なんですけど。

容姿描写（下手）では30代前半という事になっていますよね？
確か。

となると、単純計算で30（親）－16（子）＝14（歳の差）（子供を産んだ時の親の年齢）になりますよね？

14歳の時に産ませるって事が無いとして、30代前半のギリギリである34歳でやっと18歳になるわけですから。

黒笠霧雄は、高校在学中に女の人に子供を産ませたという事になるんじゃない……？

ま、俺は知りません。他人の家庭の事情に深く入り込む気はありません。

それでも作者かあんたは、というツツコミは厳禁の方で

愚行

手に持っていたサバイバルナイフは折れ、体に傷は無いが自分でも分かるくらいに息が上がっていた。

ショッピングモール内にて、樋川は気絶している灯澄に近付きながら息を整えようとする。

(……………白闇って相当厄介とは聞いてたが、まさかココまでとは……………タイミングが悪い……………それにあのクソ野郎、雇い主だからって好き勝手に命令しやがって……………)

黒笠霧雄。樋川の雇い主である男の顔を思い浮かべて、思わず顔をしかめてしまう。

急に護衛の依頼から、拉致軟禁監視の依頼に変更してきた男。

丁度その時に灯澄と景がショッピングモールへ買い物に来てしまったため、景と別れた後に行動しようと考えたら敵からの奇襲。

少し出来過ぎているようにも感じた。いや、そもそも敵から奇襲される可能性を考えて依頼を変更した為、こうなったとしても偶然という言葉で片付けられるだろう。

しかしそれなら、最初から灯澄を学校になど通わせずに保護という名目で軟禁したほうがよっぽど都合がいい。

突然姿を消すより合理的で効率もかなりいいはずだ。

それなのに霧雄は灯澄をわざわざ学校に行かせた。高いリスクがあるにも関わらず。わざわざ自分などを雇ってまで。

それは何故か……………。

(……………蓮野、景……………)

この数日間の学校生活において、黒笠灯澄が一番気にしていた人物。その少年の顔と名前がすぐさまに思い浮かんだ。

景は灯澄が記憶を無くす前の事件にも関わっている。そして唯一彼が社会との関わりをもっているところは学校といってもいい。

わざわざ学校に行かせたのは、蓮野景に逢わせるため……………？

そんな思考が浮かび上がりながらも、樋川は灯澄を担ぎショッピングモールを出ようとした。

どちらにしろ自分は霧雄から金で雇われている。雇い主の依頼を遂行することが一番。それ以外の考察は二の次だ。

「樋川ア！」

歩き出したところで、後ろから少年の声による怒声を浴びせられた。振り返ると、そこにいるのは紛れもなく蓮野景だった。

（……この状況を見ただけで、わざわざ怒りを露わにする要素は見つからない………本当、あの男は何を考えているんだ……）

護衛役である樋川がただ灯澄を担いでいる姿だけで、拉致の姿だとは思わない。

つまり誰かがこれからする樋川の行動を告げ口したと考えるのが妥当だ。

それが出来る人物など、命令した本人である黒笠霧雄しかいないのだが。

あの男は理由は分からないが景に重点においている。そして自分はその重点に倒されるべき敵として設定されたようだ。

そう悟った樋川は近くに灯澄を置き、景と対峙する。

「何か用ですか、クズ」

「灯澄をどうするつもりだ？」

「どうもこうも、実家に連れて帰ってあげて誰かに襲われないか見張るだけですよ」

「………そういう命令だもんなあ」

「まさかと思いますが、クズごときが俺を止めようと今から動こうとするつもりですか？」

「だったら？」

「愚行にも程がある。言っておきますが、先程教えた才能者タレントとの戦いは10割方嘘ですからね」

「それって全部じゃねえーかよ！」

「そうです。まさか俺が後々自分が不利になるかもしれないのに、

わざわざ敵になるかもしれない人間を成長させるとでも？」

「ま、そうだろうなあ」

「……想定内のことでしたか。それでも俺に立ち向かうと？」

「だってお前、黒笠を何としてでも連れて行くんだろ？」

黒笠灯澄を連れて行こうとする限り、景は邪魔をしてくる。

例えば、無駄な抵抗だと分かっている。自分が無能だと知っている。

「そういうタイプ、一番厄介だ」

そう言って樋川は指を弾く。

それと共に天井にあるガラス窓が割れ、大量の破片が景の元に落ちてくる。

とっさに景は店内に入り、ガラスの雨を躲す。

当然、景がガラスの雨を躲している間に樋川は次の手を用意し終えていた。

景の入った店は、男性物の洋服店のようで店内に隠れようと思えば隠れられるような場所はいくつかあった。

しかし隠れる暇などなく、ガラスが床に当たり騒音を出す中、店の入り口から放りこまれた火の塊によって瞬く間に店内が火の海へと変わっていく。

入り口を塞がれ、逃げ場が無くなった景は店内に裏口がないかどうかを確認かめるために店の奥へと入っていく。

しかし残念ながら裏口らしきものは見当たらず、捨て身覚悟で景は店の入り口から脱出する。

多少の火傷を負いながら店外へと脱出した景は待ち受けていた樋川の蹴りを躲す。

しかしそのせいでガラス窓が頭上にある位置に来てしまった。

樋川は二度指を鳴らし、ガラスの雨を降らせる。

「ッ!？」

それをまた躲すため、動き出そうとした景の耳が不快な雑音ノイズを捉えてしまい、ほんの一瞬だけ行動が遅れた。

結果、ガラスの雨は動くことが出来なかった景の体に容赦なく降り注ぐ。

愚行（後書き）

今年最後の久しぶりの更新。よいお年を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0675v/>

何故か彼女はついて来る

2011年12月31日18時48分発行